

# 服飾デザインと地域資源のレジリエンス ～スーパーグローバル・ファッションワークショップ2019と アグリアート・フェスティバル2019を事例として～

## Clothing Design and Resilience of Regional Resources: Case Studies of the Super Global Fashion Design Workshop 2019 and the Agri-arts Festival 2019

水谷由美子\* 高橋潤一郎・下川まつゑ\*\* 田村奈美\*\*\*  
Yumiko Mizutani\*  
Junichiro Takahashi / Matsue Shimokawa\*\*  
Nami Tamura\*\*\*

### 要旨：

日本では明治維新以後の西欧化により日本の伝統文化の衰退あるいは消滅の危機を迎え、大正末期に柳宗悦が民藝運動を起こして、地域固有の材料や技術を用いた民衆の芸術の研究調査と収集を行った。90年後の現在、地方創生の政策の元で、日本各地の地域資源である手工芸や伝統をフィールドとして、服飾デザインを通じた手漉き和紙や藍染さらに編織を通じたまちづくりに参加してきた。そこで、それぞれの地域あるいは個人がどのように地域資源のレジリエンスを具体化しているかについて、調査研究するとともに服飾創造を行うのがここでの目的である。レジリエンスの現状と概念規定については枝廣淳子の『レジリエンスとは何か』をまた、ここで重視している文化芸術での地域文化・産業の活性化あるいは創生の立場では、中川眞の『アート之力』の事例を参考にした。

具体的には本論は長門市で7年間地域の農業文化・産業の復興を目的に取り組んできたアグリアート・フェスティバル2019と、複数以上の国の若者を対象とした国際交流による服飾造形の共創を目指すスーパーグローバル・ファッションワークショップ2019を事例として検討したものである。

**Abstract:** In Japan, Westernization after the Meiji Restoration led to the decline or disappearance of Japanese traditional culture. At the end of the Taisho era, Muneyoshi Yanagi launched a folk art movement called 'Mingei-undo', during which he conducted a research study of popular art using local materials and techniques and collected popular art. Ninety years later, under the policy of regional revitalization, reconstruction activities such as handicrafts and traditional industries, which are local resources in various parts of Japan, are being carried out.

The author has participated in handmade Japanese paper-making, indigo dyeing, and fabric-weaving workshops here in Yamaguchi Prefecture during the research of clothing design and community development. Therefore, the purpose of this study is to research and study how each region or individual embodies the resilience of local resources and to create clothing. For the current status of the concept of resilience, see "What is Resilience?", by Junko Eda. The emphasis on revitalizing or creating regional culture and industry in cultural arts, which we emphasize here, is based on the case of Shin Nakagawa's "Art no Chikara."

Specifically, this paper focuses on the 'Agri-art Festival 2019', which has been working on the revival of agricultural culture and industry in the region for seven years, and the 'Super Global Fashion Workshop 2019' which aims for the co-creation of fashion modeling through international exchanges for young people from more than one country.

キーワード：服飾デザイン 地域資源 レジリエンス まちづくり 和紙 藍 編織

Keywords : Clothing Design, Regional Resources, Resilience, Community Development  
Handcraft Japanese Paper, Japan Blue, Striped Weaving

\* 山口県立大学大学院国際文化学研究所教授

\*\* 山口県立大学大学院国際文化学研究所2年

\*\*\*山口県立大学大学院国際文化学研究所1年

## はじめに

現在、日本の各地域では近代化に伴う工業化によって、地域で育まれてきた伝統工芸や産業が衰退あるいは消滅するという事態に見舞われている。このような現象はすでに明治維新以後に起きている。日本は江戸時代の鎖国によって固有の文化を育み創造してきた。それ故に、西欧諸外国は日本文化の固有の創造性を評価し愛でることによって、それぞれの国でジャポニスムが起きた。

しかしながら、近代化＝西欧化という政策の元で、生活文化の価値が変容されていった。大正末期になり日本の地域で生み出されていた生活造形の喪失に危機感をもった柳宗悦がアーツ&クラフツ運動の影響を受けつつも、民衆が地域で生み出してきた芸術である生活工芸の価値を再認識するために河井寛次郎や浜田庄司とともに民藝運動を開始した。

それは宮中や高級市民に向けた伝統工芸ではなく、地域の生活者を対象とした手工芸であった。柳は地域の素材や固有の技術によって生み出された衣服を含む生活道具に価値を見出し、全国各地を歩き、地域の民衆の芸術である民藝を収集したのである。柳は民藝に対して人々がもつ「親しみ」を根底の思想として大切にしていた。現代の「今なぜ民藝か」という視点で、民藝について研究している鞍田崇は『民藝のインティマシー 「いとおしさ」をデザインする』の中で、親しみを「いとおしさ＝インティマシー<sup>(注1)</sup>」と形容している。

本論では概念論議をするというよりも実践活動の検証を通じて、地域資源のレジリエンスについて検討するものである。しかし基本として、地域固有の文化や歴史さらに伝統から生み出されるものやそれを作り出す人に対する愛おしさあるいは親しみという感情が、ひいては地域への愛情や誇りを生み出すものではないかという仮説を考えている。

以下では、長門地域で実践してきたアグリアート・フェスティバル、および国際交流と地域資源を結びつけインバウンドデスティネーションとして磨いていくというコンセプトの元で活動したスーパーグローバル・ファッションワークショップを事例とした、地域資源を活用した服飾デザインが、どのようなレジリエンスによって地域活性化に繋がっているのかについて検討する。

第1章ではまず水谷がレジリエンスの概念のもつ意味や現代の思潮について述べる。特に、研究創作の概要と方法について枝廣淳子の『レジリエンスとは何か

<sup>(注2)</sup>』を、また、芸術文化を通じた地域再生について実践的研究の嚆矢とも言える中川真の『アートの方<sup>(注3)</sup>』をそれぞれ参照し、服飾デザインと地域資源のレジリエンスについての可能性について検討する。

第2章では高橋がスーパーグローバル・ファッションワークショップ2019の実施内容やプロセスを検証する。第3章では、アグリアート・フェスティバル2019「光の棚田」についての概要とそこで製作された作品のコンセプトや実際の作品について、下川が述べる。また、そこでの「移住」をテーマにして具体的にデザインされた作品について、田村が自らのグループの作品製作のプロセスと作品について述べる。

本論全体を水谷が監修するとともに、おわりに地域資源のレジリエンスを検討することを通じて、ここでの研究方法や成果が地域の課題解決の実践としてどのような提案ができるかについて述べる。

## 1章

### (1) 地域におけるものづくりの変化と背景

柳宗悦が民藝運動を起こした背景は、工業化によって人々が長年、地域の生活文化を基盤として手仕事によって作られてきた手工芸が失われようとしているという状況であった。影響を受けたイギリスのアーツ&クラフツ運動が工業化によって、手工芸の時代に生み出された造形美が下がったことにより、中世の手工芸に帰ろうと呼びかけたのとは異なっている。日本の地域で育まれてきた、無名の職人によって作られる日常の道具としての手工芸の再興に眼差しが向けられたのだ。

それから約90年近い時間が経て、現在の日本は脱工業化が進んでいる。人々の関心はものよりもことへ、そしてものやことは実態がつかみにくい情報になっている。グローバル化および高度情報化社会となり、自分が暮らす隣近所のこととはほとんど知らないが、世界の動きや好きな領域で共感し合える他人とのコミュニケーションに関心が高まっている。

1970年代から1980年度における工業化によって行き着いた大量生産、大量消費の時代、さらにブランド至上主義の時代を迎えた。デザインは流行を生み出し、消費を訴求する装置の側面が強くなり、人々の暮らしを豊かにし、新しい価値を体験するということを凌ぐほどになった。

そして1991年のバブル経済の崩壊を体験した。そこから人々は地に足がついた普通の暮らしへの関心が高まる。現在は、この時代の結果生まれてきたファストファッション隆盛の時代の真ただ中にある。

一方で地球温暖化によるダメージが世界規模で起きているために、地球環境の持続可能性への関心は、一部の環境に関心がある人のみならず、世界規模の普通の人々に共通の関心事となっている。つまり、サステナブルな社会の創造が地球規模の課題となっている。2015年に国連で提唱されたSDGsに基づき、世界では17のサステナブルな開発目標に向かって進んでいる。

特に2011年に起きた東日本大震災を経験し、多くの日本人が人と人の絆や人と地域との関わりについて大切に考えるようになった。心の底から湧き出るような地域への愛着が地域のレジリエンスに大きく貢献するのではないかと。この仮説を裏付けるような現実がある。

人々は安価で手軽にモードを体験できるファストファッションに傾倒しつつも、誰がどのような考えや方法によって作っているかを理解し、共感を覚えることで、値段は高いけれど、質のよいものを購入するという、消費行動が生まれている。その対象は東北の地域発ブランドである<sup>(注4)</sup>。

一方で、地域創生という政策による流れもある。バブル経済の頂点に達しようとしていた1980年代の終わり頃に、地域創生の政策である「1億創生」の事業が全国に広まり、地域ごとに地域振興の事業が行われ、地域への意識が浸透したと言ってもよい。

東京への一極集中やグローバル化さらに情報化の進展によって、人々の暮らしが地域コミュニティから遊離し、暮らしそのものが地域と希薄な結びつきがなくなり、情報の中にリアリティを感じるという生活スタイルはその後進行した。

筆者はブランド化、グローバル化した情報文化としてのファッションとは異なる、地域コミュニティの創造という視点からオルタナティブな服飾デザインを提唱し、京都（1981年-1994年）や山口（1994年-現在）において創作活動を行ってきた。そこでは、地域の伝統文化や産業に焦点を当ててきた。特に、最終的な表現メディアとして地域コミュニティとともにファッションショーを運営することから、地域の活性化に関する企画運営を行ってきた。ここでは、服飾デザインの可能性として服飾ビジネスに貢献する機能だけでなく、コミュニティの創造、発展さらにその地域を土壌とする開発に、服飾デザインは活用できるのではないかとという仮説を立てて1994年から山口県をフィールドとして活動を行ってきた。

2003年に地域の伝統産業であった柳井縞が復活して10周年記念のファッションショーの演出や服飾デザインを依頼されたことをきっかけに、地域の伝統産業や

工芸とのつながりができ、玖珂縮、徳地手漉き和紙さらに防府市富海の藍の郷づくりなどの活動へと展開されてきた。

東日本大震災以後に安倍昭恵夫人とこれからの社会で、農業が果たす役割が大きいという共通の認識を持ち、長門市で棚田の景観保全や農業文化振興を目標とするアグリアート・フェスティバルを2013年から開始した。若者への農業のある生活への訴求としてスタイルから入るのは有効ではないかという考えのもとで、モンペを改良しおしゃれな作業着として提案するmompeckoを開発してきた。特に、ファッションショーで提案して終わりではなく、実際に商品開発をして地域内外にて販売実験も行なってきた。

それぞれの手工芸家は紙漉きや藍染の原料の段階と加工する段階との両方で農業に大に関わっている。地域の伝統工芸や産業のアトリエを訪問することから、稲作、野菜や果物栽培などだけでなく、綿、楮や三桧さらに蓼藍なども地域での重要な農業であった。改めてその認識が持てたことは新鮮な驚きであり、学生とともに共有できた。それを地域の人々にファッションショーを通じて発信してきた。

上記の仕事は農閑期の仕事で重労働であり、自然に左右されるという負荷があった。近代化により日本の地域に大規模な企業の工場が進出され、地域の人々の労働力が工場へ吸引されて行くことで、伝統工芸や産業があつと言う間に衰退するということがあった。たとえば、山口市の徳地では1973年頃に藤木地域のほとんどの家で紙漉が行なわれていたが、男女を問わず人々はバスで送迎される工場での仕事へと移ってしまった。地域の誇りとして継承することの大切さを感じた家のみが、他所での仕事をやめて再び地域の伝統産業を守る活動に戻っている。

現在、日本ではAIやIoTの普及の時代が今そこまで来ており、都会への一局集中が加速度的に進展している。一方、この現象に歯止めをかけるべく、政府の地域創生政策により「地域おこし協力隊」の制度が平成21年に誕生した。その結果、多くの若者が都会から全国の中山間地域に入り、家族あるいは地域コミュニティによって継承されてきたが、消滅寸前の伝統工芸や原材料生産などを継承し、新しい視点からビジネスを起す役割を担っている。

山口県の各市町村もその例外ではなく、少子高齢化が急速に進んでいる中山間地域や郊外地域で、地域おこし協力隊が活躍している。筆者は当初は山口市の歴史的、文化的、さらに人物との関わりから生まれる地

域資源に着目していたが、2000年初期から柳井市、長門市、防府市などとの関係の中で、地域おこし協力隊やそれを卒業して地域で活動している若者たちと関わりながら、服飾デザインの創造活動を継続してきた。

地域振興に対して、他者性の役割や意味についても具体例の中で検討したいと考えている。地域おこし協力隊のみならず、筆者も長年、山口に暮らしているとはいえ、外から来た人間である。地域の人の自らの地域への愛着だけでなく、外者がその地域で暮らすことで、比較対象することから生まれるアイデアや情熱にも注目する必要があると考える。

## (2) 地域資源と国際交流そしてワークショップ

筆者は2000年頃からフィンランドとの交流をはじめ、その結果、客員教授としてヘルシンキ芸術デザイン大学大学院（現アールト大学大学院）に半年滞在した。これをきっかけとしてフィンランドのデザインに対する価値観、手法などに触れ、新しくデザインの視野が広がった。その後、所属する山口県立大学が国際共同研究に力を入れることになり、フィンランドの北極圏の入り口にあるラップランド大学との共同研究を提案した。この提案がラップランド大学から受け入れられ、2009年から共同研究が開催された。

その時に、山口の地域資源とフィンランド特に北方地域の地域資源を活用した服飾を創作するワークショップを毎年1回、ラップランド大学で開催し、同じスタイルで2017年まで継続した。2016年からは山口に海外の大学から教員や学生を招待し、山口の地域資源を使ったワークショップ、スーパーグローバル・ファッションワークショップを継続して開催している。2019年の事例については第2章で詳細を述べる。

山口市徳地の手漉き和紙は4回のワークショップにおいて3つの工房で実施してきた。防府市では産学公民で活動している「藍の郷づくり」の拠点である旧清水家住宅と草衣so-iで藍染めのワークショップを開催した。草衣は藍の郷づくりの一環で、防府市の地域おこし協力隊として東京から移住してきた若者が卒業後に立ち上げた藍染め専門の工房である。

主に手漉き和紙と藍染めを活かしたワークショップを各工房で実施してきた。2018年にある考えが筆者の脳裏によぎった。

身近な人々が顧客の対象ということが基本であるが、時代性としてインバウンドが特定の都会から地域に広がりつつあることを捉まえて、2019年から各工房とそこでのワークショップをインバウンド観光のデステーションでありその目的とすることがレジリエンス

を高める1つの方法なのではないかと考えた。

海外のゲスト参加者と工房の主宰者の両方で、伝統工芸の捉え方、技法、手仕事の価値観やその内容などについて、国際文化比較をしながら進めて行くことが可能である。また、工房が国際化することで工房のグローバルな存在感が生まれる。また、指導者も海外の人々が興味を持つ視点や指導方法について、コミュニケーションをとる方法なども学ぶことになる。

こうした経験を重ねることで、我々を介さない方法で、世界で興味をもった人が来る場合にも、工房の主宰者はスムーズにインバウンド観光客を受け入れることが可能ではないかと考えて、ワークショップを計画した。他者の視点として、海外のゲストは元より、山口県立大学企画デザイン研究室の筆者を含め学生もほとんどが山口市あるいは防府市外出身者であり、上記したように外者である。彼らは新鮮な眼差しをもって非常に情熱的にワークショップに挑んだ。もっとも、草衣の主宰者も東京からの移住者であり、他者性が防府市富海で新たにはじまった藍の郷づくりに活力を与える1つのきっかけになることが期待されている。

## (3) 改めて地域資源のレジリエンスとは

本論のテーマは「服飾デザインと地域資源のレジリエンス」である。レジリエンスという英語resilienceは、「復元力」「弾力性」「再起性」と訳される。もともとは物理用語の一つだった言葉だが、現在では生態系の分野や心理学の分野で概念として発展してきている。枝廣淳子は『レジリエンスとは何か』で、レジリエンスは「しなやかに立ち直る力<sup>(注5)</sup>」と表現している。「教育、子育て、防災、地域づくり、温暖化対策など、さまざまな分野で使われるようになっており、数多くの『レジリエンス向上』のための取り組みが展開されています<sup>(注6)</sup>」と述べている。また、2008年のリーマンショックによる全世界を巻き込んだ経済領域で、アメリカを中心にレジリエンスが問われてきた。

ここでは芸術文化による地域文化や地域産業の再興としてのレジリエンスについて注目している。中川真の『アートの力』で紹介された以下の事例はこの領域でのレジリエンスについて捉えた嚆矢である。2006年に起きたジャワ島中部大震災以後のガムラン音楽による共同活動<sup>(注7)</sup>や2011年に起きた東日本大震災で被害にあった地域の誇りであった神楽の復興に向けた支援や地域コミュニティの活動<sup>(注8)</sup>について、中川は調査研究を行うとともに自ら共同創作などを通じて実践的に研究活動を行っている。

筆者は芸術文化活動を通じて、地域の課題を発見し、

創作活動を通して発信しながら、地域内外の人々がその課題を共有し、解決に向けた行動を協働し、共創することを目指してきた。

そのために、地域資源のレジリエンスという時のレジリエンスを、「再生する力」と定義する。

山口県立大学企画デザイン研究室は長門市からの受託研究を受けて、アグリアート・フェスティバルを継続してきた。2018年と2019年には行政から地域課題として「移住」というテーマを提案されて、ファッションショーやシンポジウムのテーマにしてきた。長門市を代表する棚田がある宇津賀地区では少子高齢化と農業離れが進んでいる背景から、「移住」への期待が高まっているのだ。

長門市における活動はアグリアート・フェスティバルと同時に進行で、中山間地域における地域活性化の活動を、長門市宇津賀地域をフィールドとして実施してきた。宇津賀地区地域づくり協議会とともに、地域資源の商品開発におけるパッケージや売り方などの提案を行なった。具体的には宇津賀地区では竹炭を使って、長年住んでいる住人やUターンで帰ってきた人々が新しい地域活性化に向けたコミュニティを作り、商品開発をしようとしていた。山口県の中山間地域若者元氣創出事業によって、ゼミの学生が地域とともに商品開発を担うという実践を行ってきた。

アグリアート・フェスティバルがはじまってしばらくして、2019年に長門市で第25回全国棚田（千枚田）サミットが開催されることが決まった。長門市には日本海に面した棚田100選に選ばれている東後畑の美しい棚田がある。この棚田のブランディングがファッションショーのテーマの根底にあった。

アグリアート・フェスティバルは第2回目から命名した名称である。ファッションショーを中軸として、地域の農業を考えるミニトークショー、ミニコンサートや舞踊などを同時開催して、芸術文化から農業文化と産業を振興しようとしたのである。

そのためには、実際に田植えや稲刈りのイベントを実施して、地域の人々に伝統的な農業を改めて再認識する場にするとともに、地域の高校生や筆者のゼミ生たちには、農業のみならず、稲作とともにあった日本の伝統文化についても新たな認識を持つように意図して開催を継続してきた。

山口市では2015年に産学公が共同で山口市徳地地域に伝統的に継承されてきた手漉き和紙で地域づくりをしようとする総合的な活動に参加した。総務省の支援を受け、三椏畑を作る農業分野、徳地手漉き和紙を通

じた商品開発の部門に分かれて実施した。筆者は高知県梶原で紙漉を行なっているロギール・アウテンボーガルドを山口に招聘して、和紙のモニュメントを作るワークショップを地域の人々と開催した。

また、和紙による服飾デザインを山口で活動している作家に呼びかけ、山口県立美術館で展覧会を開催した。その他に協力したものとして、フィンランドのマリメッコでファッションデザイナーとして活躍している大田舞を呼んで、徳地手漉き和紙のブランディングを行なった。その他、ラップランド大学から山口県立大学に交換留学している大学院生や地域で創作活動をしていたオーストラリアの若者と一緒に、ヒンメリによる創作や地域のシャッターや白壁に絵を描くなどのコーディネートを研究室で行なった。

#### (4) 作業着とオシャレ着であるmompekkkoとゼロウエイスト

地域の生活道具としての衣服や布、陶芸そして和紙などは、かつては地域の風土や生活文化と深く繋がっていた。モンペの歴史を調べると東北地域で発達した作業着としてのモンペは、第2次世界大戦頃に全国の女性が着物の上に履く袴形式の衣服になった。会津若松では、モンペはオシャレ着でサルッパカマが作業着として認識されていたようだ。

柳は民藝品とは「一般の民衆が日々の生活に必要とする品」を指すと定義しており、その特性は「1 実用性、2 無銘性、3 複数性、4 廉価性、5 労働性、6 地方性、7 分業性、8 伝統性、9 他力性<sup>(注9)</sup>」である。モンペは民芸品なのか。モンペは産業というよりも、各家庭で着物をほどこいて作られており、手作業である。

実用性、無銘性、複数性、廉価性、地方性、伝統性などは当てはまっていると言える。モンペが全国に広がった時、地域で呼び名や形が少しずつ異なっていた。現在、量販店などで安価に販売されているモンペは、現在のパンツのパターンと従来のモンペのパターンが融合されて作られている。

筆者が研究室で開発してきたmompekkkoは、久留米緋の工場（大刀洗市）で素材から織っている。マシンメイドであるが、かなり手作業的な領域に近いものである。久留米緋の里にある合資会社ローリングでは、伝統的なモンペを作っており、直線裁ちを使って、なるべく無駄な布が出ない構成を採用している。伝統的には裁ち落とす部位の布を臀部や前膝に縫い合わせて、作業着としての丈夫さを表している。

研究室で開発してきたmompekkkoは、コンセプトを微妙にずらしているので毎年パターンを改良している。中でも、少量生産のためにコストが高くなるので、実

際の農作業には量販店のものには勝てないのだ。それ故に、田植フェスティバルなどには有効であるが、多くの場合には部屋着、街着そしてヨガ用などとして開発している。制作によって出た端切れは、手ぬぐいの端の装飾や小物の開発をして、残り布を有効に使っている。

#### (5) 地域資源の連携と共創

スーパーグローバル・ファッションワークショップ2019に、海外のゲストとともにワークショップを実施した「草衣so-i」と徳地の手漉き和紙の工房「千々松和紙工房」（屋号は千々松紙工）で別々に素材作りをした。そこで、前者を主宰する大道竜士と後者を主宰する千々松友之は交流があると聞いたので、藍染めの和紙や名刺などオリジナルな和紙の注文をして、別の作品に使用した。

こうした連携による創造が繰り返されることによって本来、行なわないような技術やそれを使用した商品が生まれて来るのは非常に新鮮である。地域の活動や生活の中で人と人、人とのものの交流が活発になることで、地域ならではの産業が発展するのではないかと期待している。

また、現在進行形である防府市野島の地域づくりの活動では、防府市の富海は藍染めを中心に農業から商品開発までを行なっている。一方、同市の野島では愛称が茜島なので、筆者は茜色をキーとしてブランディングする提案を地元や行政に対して行っている。そこで、学生が大道に茜染めの手ほどきを受け、何度か訓練をした後で野島住人に対して茜染めのワークショップを実施した。

地域資源を点で考えるのではなく、防府市なら富海と野島においてそれぞれ染織工芸で地域振興をしていくことで、認知度が高まるばかりではなく、創造的な可能性が広がるのである。

このようなプロセスを経て、実際にスーパーグローバル・ファッションワークショップ2019の3点の作品は、藍染めと茜染めの布、徳地手漉き和紙、およびデニムを用いて制作された。デニムは岡山や広島が産地として有名であるが、山口はデニム加工やファッション製造面での拠点であった。それ故に、2000年から2009年の10年間、デニムをテーマとしてファッションデザインコンテスト「ジャパンファッションデザインコンテストin山口」が開催された。

2006年に山口県で開催された第21回国民文化祭におけるファッション振興実行委員会は、デニムを取り上げて山口市を舞台に多くのプロジェクトを開催した。

山口県はデニム加工を地域資源として認定した。地域の商店街やあちらこちらの施設でデニムに関するイベントが繰り返されたために、地域ではデニムファッションは山口の特徴あるものだという認識が浸透した。

上記の背景故に、ラップランド大学で行なわれたワークショップでは必ずデニムを持参し、メインの生地として使用してきた。

#### (6) だれでも気軽に取り組めるアートから熟練のアートへ

絵を描く行為、染織する行為は大きさな装置や機械がなくても、だれでもが取り組める表現手段としての側面がある。もっとも、商品として世の中に出して行くためには、熟練が必要でありプロ的な技術やものづくりの思考が必要である。

しかし、プロの伝統工芸の世界はあるが、一方で誰でも身近な素材を用いて手軽に染めることができる、あるいは段ボールで織物を作ることもできるのだ。地域資源のレジリエンスは、まずは地域の人々が気楽に始められることも大切である。プロの職人と普通の住人が共同して行くことで、地域固有のものづくりが発展する。

元々あったものを復興する、あるいは日本の地域で伝統手工芸として行なわれてきたものを移植して新しい地域の伝統工芸とするためには、地域の人々の心にやる気の火を付ける必要がある。地域愛というか地域のコミュニティから生まれて来る共感あるいは創作のためにコミュニティを作り活動して、慈しみ育てて行くこうと長い目で継続して成し遂げようとする意志が必要である。

先導するプロとそれに共感して協働する地域住人の関係が構築されること、そこに外者の情熱や行動が加わることで、地域資源のレジリエンスは高まるのではないかと考える。

#### (7) 内側の継承者のレジリエンス

徳地手漉き和紙は、山口市の地域おこし協力隊と地域住人のグループによって、新たな活気が生まれている。前者は先祖から伝わる手漉き和紙を継承するために大阪から帰ってきた千々松友之の「千々松紙工」と東京から移住してきた「徳地和紙ワークス」を立ち上げた船瀬春香がいる。

そして、地域住人が作った組織に「山口とくち和紙振興会 結の香」がある。当初は、この組織に上記の地域おこし協力隊として入ってきた千々松と船瀬も参加していたが、現在は独立して起業している。

ここでは、伝統の継承者としての個人と地域住人の組織のレジリエンスについて述べたい。千々松は筆者

のインタビューに答えた。「子供の頃からいずれは自分が祖父から続く紙漉きを継承するだろうと考えていたが、サラリーマンを終えてからと考えていた。」実際は、山口市が徳地観光協会（現一般社団法人山口観光コンベンション協会徳地支部）と筆者の研究室がまちづくりの活動を受けて、総務省からの助成制度を当てたために、大きな徳地和紙振興のプロジェクトが行われ、地域おこし協力隊にさらなる活性化を担ってもらおうということになった。

このプロジェクトの結果、地域の人々が結の香を立ち上げ、千々松と船瀬が地域おこし協力隊として徳地にきた。千々松哲也が紙漉き、山内幸彦が紙漉きもするが原料を製造することが主な仕事として行なっていた徳地和紙の現状に、新しい風を吹かせた。

特に千々松哲也が高齢で80代になっていたために、山口市も後継者問題を心配していた。現在は、上記のように千々松友之と山内を含む結の香（木村和枝が現在の会長）が、内側からのレジリエンスを高めるべく、ビジネス、地域の子供達の人材育成、まちづくりなどの活動を行い、個人的な継承から山口市のまちづくりへと広がっている。

前項では外の力について述べたが、これは触媒としての効果がある。もっとも、富海に住み着き工房を開設した大道竜士のように定着した者の力も大きい。富海では伝統的に藍染めがあったのではなく、一人の作家が作ったグループから発展したものである。

徳地の場合には歴史を遡ることができる古い伝統工芸であり、地域内の人々の精神的なアイデンティティともなるような対象である。それ故に、地域住人の活動は地域への誇りの再生としてのレジリエンスを高めるものである。

さらに、英語力の高い船瀬は海外からのワークショップ参加者に対して、流暢な説明をすることが可能である。千々松和紙工房との連携によって、インバウンドのデスティネーションの受け入れ準備は整っている。外の力と内の力のコラボレーションによって、新たな可能性が導かれている。

徳地和紙のレジリエンスは着実に高まっているが、経済的な活動が活発にならないと継続性があやうくなる。この点に対して、見届けたいと考える。

## 第2章 スーパーグローバル・ファッション

### ワークショップSGFWS 2019 について

#### (1) SGFWSの背景

山口県立大学における服飾デザインに関する国際的

なワークショップは、2009年からラップランド大学に企画デザイン研究室の学生を連れて訪問し、現地の教員と学生とともに実施したことに始まっている。そして、山口県立大学では、ラップランド大学から毎年のように教員が来山し、プレゼンテーションを受けてきた。

2016年からは双方向でワークショップを毎年行っている。このワークショップをスーパーグローバル・ファッションワークショップと命名した。2016年はフランス、フィンランド、中国そして韓国の4カ国の学生と教授を招聘した。2年目の2017年、3年目の2018年はフィンランドに加えて、ハワイの学生と教員が参加した。

ここでは2019年度を事例としている。今年度はフィンランドのラップランド大学からアナ・ヌウティネン Ana Nuutinen教授と学生1名（テキスタイル専攻1名）が参加した。アメリカ合衆国のハワイ大学マウイカレッジからは、日系3世のシェリル・マエダCherly Maeda准教授と、学生2名（ハワイ出身とプエルトリコ出身）が参加した。ラップランド大学と11年目、ハワイ大学マウイカレッジとは3年目の交流となる。

企画・プロデュース・運営は水谷由美子が担い、上記教員とともに指導を行なった。学生の運営リーダーは高橋潤一郎が担当した。

今回、伝統工芸の工房で以下のような進展が見られたことは特筆に値する。先の3年間は、手漉き和紙、本藍染め、デニム加工などの体験から行い、服飾作品のための素材作りのWSへと発展させてきたが、今年度は4年目ということもあり、ワークショップは試す段階から、実際の作品製作のための素材作りについて参加者自らが製作することができた。

#### (1) SGFWS 2019 の手法

##### 1) サービスデザインの手法を取り入れたデザインプロセス

過去3年間に渡り行ったWSでは、5日間の日程の中で、2日間は地域の伝統工芸の体験や、地場産業での研修、日本の伝統建築の見学などを行なった。残りの3日間で、サービスデザインの手法を用いてデザインした作品を制作した。本WSにおけるサービスデザインによる制作手法とは、①メインテーマからグループテーマを決定する。②グループテーマに基づきリサーチとペルソナの設定およびムードボードを制作する。③デザインスケッチを行い、デザイン画を決定する。④前半2日間で行なった研修や体験の場で作られ

た素材を活かして、制作を行う。素材は主にデニム生地、徳地和紙、藍染を使用する。主に以上の4工程を経て進められた。

### 2) デザインプロセスにWEBミーティングを導入

さて、前述した過去3年間の経験を踏まえ本年は、新たな試みにも挑戦した。それは、インターネットを利用し、海外ゲストが山口に来る前にWEBミーティングで①〜③までの工程を行う事である。本年はWSの期間が2019年10月7日から11日の5日間で、WEBミーティングは、2019年9月より開始した。方法として、初めはメールを使ってWEBミーティングをする日を打ち合わせ、実際のWEBミーティングはskypeを利用して行なった。初回skypeミーティングは9月10日にフィンランドのラップランド大学、アメリカ合衆国のハワイ大学マウイカレッジと本大学3大学を繋ぎ、参加者全員で行なった。それ以降は、グループを3つに分けそれぞれにWEBミーティングを行なった。グループは、ラップランド大学の学生と本学学生が1グループ、マウイカレッジ学生と本学学生が2グループである。

### 3) WEBミーティングの採用とその成果

本企画デザイン研究室でも初めての試みであるインターネットを活用したWEBミーティングによるグループワークは、有効であった。以下で、この事例を紹介しながら成功点、改善点を述べる。

成功事例としては、ラップランド大学学生とチームを組んだグループ（以下グループA）が挙げられる。グループAでは、メールにて初回のWEBミーティング前に用意しておくべき事をあらかじめ連絡した。

工程①ではグループテーマを決める。その過程としてブレインストーミングを行い、キーワードを書き出すという手順を本WSでは踏むが、事前連絡でお互



図1 電子メディア活用によるWEBミーティング

いがキーワードを持ち寄った状態で初回のWEBミーティングが進行できたことは素晴らしいかった。

この打ち合わせ中にも、お互いのパソコンのカメラを窓に向け、フィンランドと山口の景色の違いなどを確認しながら話し合いが出来たことは、次回行程②へ繋げるための良い布石となった。そして、グループテーマを決めたグループAは次回ミーティング日程を決め、ムードボード用の画像をそれまでに用意しておく事を決めて初回ミーティングを終わらせた。2回目のミーティングも事前準備が整っていたので、初回よりも短い90分程度で、しっかりとムードボードへ貼り付ける画像を決めるところまで完了した。ムードボードは本学学生が後日完成させた。2回目のWEBミーティングでは、工程③のデザインスケッチをお互いに持ち寄るという事を伝えた。最後には親しくなっていて、次は日本で会える事が楽しみだと挨拶し合った。このAグループの成功には、まず本WS WEBミーティングにおけるタスクの事前伝達が出来た事、連絡のメールがお互いの携帯電話で確認ができ、意思の疎通が早かったことがある。次に、初回ミーティングにおいて、そのタスクの意味をラップランド大学学生へ補足説明できたこと、また相手の意思を理解しこちらの意思を伝えられる英語力を持った本学学生がAグループにいたことが要因として挙げられる。

マウイカレッジの学生と本学学生との2つのチーム（以下グループB・C）には改善点があった。この2グループは、結果としてWS初日に予定していたグループテーマとムードボードの作成まで完成できていなかった。その要因として、事前連絡の不具合があった。ラップランド大学の学生と違いマウイカレッジの学生は、携帯端末ではなく大学にあるデスクトップ端末でメールを受けていたため、相互連絡のタイムロスが大きかった。これは先方の利用機器を事前確認しなかったことが原因と思われる。携帯端末へ連絡の取れるアドレスなどの確認をしていれば防げた事例であった。もう一つの要因としては、サービスデザインを使用した服飾デザインの手法が、先方に上手く伝わらなかったことがある。本学学生の英語力不足も過分にあるが、本WSの手順が元々ラップランド大学とともに開発してきたものだからだ。デザイン手法や手順が異なるマウイカレッジの学生に説明することは比較的、困難だった。

### 3) 成果と今後の課題

以上2つの事例を受け、グローバルな環境で共創する上で、参加者は自身の専門分野の事が理解でき説明

できる英語力を身に付けておく必要があること、また事前連絡で本WSの工程をしっかり説明すること、先方の使用機器の確認をすることが重要であることがわかった。また、WEBミーティング自体は上手く行かなかったが、メールでのやり取りで言葉を交わしていたため、その後のWSの工程は前年度よりもスムーズになっていた。改善すべき点が明確になり、初回の試みとしては全体的には成功と言えるのではないだろうか。尚、完成した3グループの作品に関しては、第3章にて後述する。

(2) SGFWSと地域資源のレジリエンス

先の3年間にも行ってきた手漉き和紙、本藍染めなどの体験や、地域の文化財や工場などの見学を本年も引き続き行った。前年度までは、5日間のWS期間中2日間を使って行っていたが、本年はその日程を1日多くし3日間とした。その理由として、はじめにで語った地域伝統工芸の工房をインバウンド観光のデスティネーションとするための可能性を探るためである。本年は2019年10月7日に防府市富海にある藍染め工房「草衣 so-i」にて藍染のWSを行った。8日に山口市徳地の「千々松和紙工房」で手漉き和紙の研修と体験を行った。9日は、柳井市「西蔵」で柳井縞の織物体験を行い、下松市「サロン・ド・エミール」で着物の試着を行った。これらの工房やサロンは、研究代表の水谷が以前より親しく交流してきた経緯もあるが、価値ある活動をしている点で選んだ。

しかし、本年は特に2019年4月、共同研究に参加している高橋も、公益財団法人東芝国際交流財団のJapan-Insights Exploring Expert Experiencesへ記事を掲載するために来山したMarjatta Heikkilä-Rastas氏に協力した。前述の場所を案内出来たことも選出に至った理由の一つである。この案内が、水谷にインバウンド観光のデスティネーションとして、これらの工房が磨かれて、地域資源のレジリエンスが高まるのではないかと考えさせられたからである。次に、具体的にそれぞれの場所でどの様な研修、体験が出来たかを振り返る。

1) 藍染め工房「草衣 so-i」

2018年に続き防府市富海の藍染め工房「草衣 so-i」に出かけた。主宰の大道竜士は、防府市地域おこし協力隊の3年間の期限を終えて、富海の古民家を改修し、昨年この工房をオープンさせた。大道は藍を植物から育てており、染め方も天然藍灰汁発酵建てで行っている。染める素材や色の定着材などの材料もケミカル物質を使わずに自然な技法で行なっている。海外ゲスト



図2 藍染めの準備 写真手前は染（草衣にて）

と本学学生達は、乾燥させた藍の葉やそれを2～3ヶ月発酵させた藍染の原料である「染（すくも）」の実物を見ながら、大道からの説明を受けて理解を深めていた。

染め始めてからも、地面に藍甕が埋まっていること、甕の一つが五右衛門風呂を利用していることなど新たな体験に感動していた。「藍は生き物であり、毎日温度管理と攪拌をして空気を送り込まないと、中の微生物が死んでしまい藍も死んでしまう」という説明を聞いて、藍染職人の仕事つまり伝統を維持継承することの大変さに参加者が感心していた。

WSが終わりに近づき、自分たちの作品用の生地が染め終わってくると海外ゲスト、特にマウイカレッジのマエダ准教授から、「WSは何人対応可能か？ 予約は必要か？ 期間はどのくらい可能か？ 近くに宿泊施設はあるのか？」など、具体的なインバウンドに関わる質問も出ていた。

2) 「千々松和紙工房」

千々松和紙工房で海外ゲストを最初に驚かせたことは、非常に流暢な英語で説明が始まったことだった。



図3 藍がめにて染色（草衣 so-iにて）

説明をしたのは山口市地域おこし協力隊に参加して、千々松工房を手伝っている船瀬春香である。

和紙の原料となる楮（こうぞ）や三桠（みつまた）の乾燥させた皮を見た後は、実際に植わっている畑を見学した。海外ゲストは、和紙の原料とは関係ない、日本の田舎の畑で育てられている白菜や大根にも大変興味を持っていた。三桠の畑近くに埋まっている状態の釜があった。これは三桠の皮を剥ぎやすくするために、蒸すために使用していると説明を受けた。

工房の母屋の軒下には、原料の繊維を柔らかくするための別の釜があり、小屋裏の原料を乾燥させるための場所と合わせて、和紙づくりを行う古民家の合理性



図4 徳地の手漉き和紙とその背景の説明（千々松和紙工房にて）



図5 楮の見学（千々松和紙工房の畑にて）



図6 三桠畑の見学（千々松和紙工房隣の畑にて）



図7 手漉き和紙の実践（千々松和紙工房にて）



図8 原料を煮る釜（千々松和紙工房にて）

について学んだ。一通りの説明が終わった後に、和紙漉き体験を行った。

簀桁（すけた・和紙を漉く道具）が思った以上に重いことや、舟水（和紙の原料が混ぜられたもの）は楮や三桠の繊維とトロロ（トロロアオイという植物の根から作られるのりの作用をするものでネリとも呼ばれる）と呼ばれる繋ぎを混ぜたものだとして学んだ。特にハワイ マウイカレッジのゲストは、トロロアオイの花を実際に畑で見てハイビスカスの花によく似ていることに驚いていた。

筆者が後日調べたところ、ハイビスカスもトロロアオイもアオイ科の植物であった。この手漉き和紙体験では葉書サイズの和紙を作成したが、海外からのWS参加者はサイズの割に均一に漉くことの難しさや、出来上がった和紙に圧力をかけて脱水するために、1枚1枚を真っ直ぐに重ねる難しさについて身を持って知り、それ故に和紙職人の熟練の技の偉大さを理解したようだった。

### 3) 「西蔵」

柳井市の「西蔵」は、元々大正時代末期に醤油蔵として建てられたものであり、昭和55年頃まで使われていた。平成13年に改修工事を受け、現在のギャラリー



図9 乾燥したトロロアオイの根（千々松和紙工場の畑にて）



図10 トロロアオイの花（千々松和紙工場の畑にて）

と体験工房として生まれ変わっている。その美しい木造平屋建・白壁土蔵造りの建物に、海外ゲストは感心していた。柳井縞の体験は、高機（たかばた）を使用した。踏み木に乗せた足を踏み替えて、杼（ひ）を通し、箆（おさ）を打ち付け、また足を踏み変えるという一連の作業に、ゲストたちは四苦八苦しなながら柳井縞でコースターを織った。

ワークショップ後に西藏から駐車場まで白壁のある通りを歩いたのだが、幸運なことに結婚式の前撮りに出くわした。古式の白無垢、角隠しに身を包んだ花嫁と紋付袴の花婿の姿は、海外ゲストにとってまたとない体験となった。また、近くの竹細工を製作販売している店舗にも、海外ゲスト達は大変興味を示した。

#### 4) 「サロン・ド・エミール」

本学大学院の修了生でもあり、国際美容文化研究所所長の西脇末美が代表を勤める「サロン・ド・エミール」は、下松市の複合商業施設の一角にある。ここでは西脇の好意で着物の着付け体験を行なったが、体験前に食事で立ち寄った回転寿司店も海外ゲストにとっ



図11 高機での柳井縞コースター織り（柳井西藏にて）



図12 高機での柳井縞コースター織り（柳井西藏にて）

て心踊る体験になっていた。着付け体験は、初めに半襟（本来は襦袢についている、ここでは襦袢からの着付けを割愛するための仮襟）をつけ、着物を羽織り、腰紐で仮止めし、重ね襟を入れ、帯を締め、飾り帯を作るという行程で行った。

最後には、ヘアメイクをし、髪飾りをつけ、草履を履いてサロンに併設されたフォトスタジオで写真撮影も行った。着付け体験中、西脇より着物の説明も高橋が英訳しながら受けたが、着物の柄の一つ一つ意味があることや、振袖は未婚女性が纏うこと、留袖には五つ紋があり祖先が着用者を守っていることなどの説明を興味深く聞いていた。

#### (3) まとめ 成果と課題

上で述べたように、今回のデザインプロセスにインターネットを利用した事前のWEBミーティングを初めて行い、その効果を確認できた。また、インバウンド観光のDESTINATIONで地域資源のレジリエンスを試みた。

WEBミーティングによってメンバー相互の関係がWSの前でできていること、テーマやイメージのコンセンサスが取れていることによって、スムーズにWSが始まったことは非常によい実験となった。

ハワイの学生は個々に好みのソフトを用いて日常の



図13 着付け体験 (サロン・ド・エミールにて)



図14 フォトスタジオで記念撮影 (サロン・ド・エミールにて)

コミュニケーションをしており、当初、連絡を取りにくいということがあった。このことから、それぞれの国事情、若者事情のリサーチが必要であることもわかった。

また、連絡が可能な時間帯の課題がある。WEBミーティングの場合には、時差を考慮に入れ、3カ国のプランが難しかった。その点、インターネットでメールによるコミュニケーションは時差を超えられるので、非常に便利だと改めて認識させられた。

来年は本年の改善点を踏まえ、成功事例であるラップランド大学学生とのコミュニケーションを参考にし、WSに活かしたいと考える。後述する本WSの作品制作においても、県内各地を回った体験・研修は多大なインスピレーションを参加者に与えた。具体的には、グループ1では作品の中で柳井縞の織りから着想を得て、ストールを編んで作成していた。実際の制作時間は2日間しかなかったが、WEBミーティングと前日のWSで培われたチームワークで素晴らしい作品が出来上がった。筆者も制作された作品群の完成度が年々上がっていることを実感している。

### 3章 アグリアート・フェスティバル2019について

#### (1) アグリアート・フェスティバル2019の背景



図15 ハーブ植えの様子(東後畑の棚田にて)

アグリアート・フェスティバル（以下ではAAFと記す）は2013年から始まり、長門市との共同でAAF実行委員会を毎年立ち上げ、継続してきた。今回、7回目となるAAF2019は最後の取り組みの年となった。

AAFの開催目的は2つある。1つ目は長門市油谷にある東後畑地区の棚田のブランディングである。日本の棚田百選に選ばれている東後畑の棚田の景観維持、発展に貢献できるように長門市の地域の方々との交流を通して取り組んできた。

2つ目は若者に農業文化への興味、関心を持ってもらうことである。農業とファッションを融合させた新しい農業スタイルを提案するファッションショー、農ガールコレクションを行い、ファッションの面から農業をアピールしてきた。

今回、2019年10月13日にルネッサながとにて、第25回全国棚田（千枚田）サミットin山口県長門市の開催に合わせ、全国から集まった参加者の方にAAFの集大成として発表する形となった。またサミットのプログラムの1つとして、これまで長門市と企画デザイン研究室が共同で取り組んできたAAFの7年間について発表する機会を得た。

#### (2) 現状とテーマ設定

東後畑の棚田は高齢化や後継者不足に伴って、耕作放棄地も見られる。棚田を継承していくことは、美しい風景や農業を守るだけでなく、地域活性化や生態系の保全にも繋がる。

AAFが始まった2013年頃には棚田で自然栽培米の栽培が行われており、毎年御田植え祭や、収穫祭の稲刈りに企画デザイン研究室で参加している。実際に農作業の体験を行ったり、農業者の方の声を直接聞いたりすることで、商品開発やファッション制作のアイデアを得るきっかけになっている。

今年新たな取り組みとして、長門市と NPOゆや棚田景観保存会の方々と再生した棚田を活用し、ハーブ植えを行なった。植えたハーブはジンを作るために使用され、6次産業への取り組みに発展していくところである。耕作放棄地を開拓し、棚田の景観が再生されていくことの重要性や可能性を感じる機会となった。

今回テーマを設定するにあたり、棚田の美しい風景の再生を願い、明るい未来をイメージした「光の棚田」をAAF2019の全体テーマとした。

また、長門市とのミーティングにおいて、農業の後継者不足や少子高齢化の視点から移住者を増やしたいという思いを受け、昨年に引き続き移住者のための農作業着の提案を行なった。

### (3) 制作作品について

#### 1) 光の棚田

「光の棚田」をテーマとしたAAF2019ファッションショーにて発表した作品について述べる。

まず、光の棚田を象徴する作品として、「Amaterasu or Demeter」を水谷由美子が発表した。稲作を始め農業と関わりが深い、日本の女神アマテラスと古代ギリシア神話の女神デメテルから着想した。本体のドレスは、着物のパターンと古代ギリシアのキトンのフィビュラを使う技法を取り入れた。素材はラオス産の手織りの緋生地、日本でモンペなどに用いられる緋柄と類似しているために用いた。また、華やかさや光の階調を表現するために、金糸が用いられた金襴を使用し、裏地には赤い金襴を用いて、内部から光が漏れてくるような演出をするデザインを考えた。

モデルは長年、共同研究をしてきた安倍昭恵夫人であり、光の棚田を象徴するにふさわしいパフォーマンスを行った。

続いて、下川まつゑが徳地和紙を用いたアート作品、「夜明け」「日の出」を制作した。テーマである光というワードから、生命の根源である太陽が着想源である。「夜明け」の作品には和紙に藍錠染めを施し、淡い空の色を表した。「日の出」の作品は揉み込んだ和紙の風合いを残し、日の丸を象徴的に表現した。どちらも中に着用しているワンピースのウエスト部分や上着の裾には紐を通しており、縛ることでアジャスタブルに着用可能である。ショーでは今回特別ゲストとして参加した芹那と我妻マリが着用した。芹那はパフォーマーとして、我妻は国内外で熟練したプロモデルとして、会場を圧倒するパフォーマンスを見せた。作品のイメージがモード的な特徴を見せた。

#### 2) SGFWS2019制作作品

前章で述べたワークショップを経て、3グループに分かれて作品制作を行い、ファッションショーにて発表した。共通のテーマは「Color in nature」である。素材は、徳地和紙、茜染した生地、ワークショップにて染色した藍染の生地を使用した。各グループの制作作品について紹介する。

グループ1のテーマは「BLUE HOUR」である。制



図16 「Amaterasu or Demeter」  
デザイン 水谷由美子 モデル 安倍昭恵



図17 「夜明け」  
デザイン 下川まつゑ モデル 芹那



図18 「日の出」  
デザイン 下川まつゑ モデル 我妻マリ

作者は山本成美、角谷優華、升田有紀、高橋潤一郎、Emma Maria Johanna Napar (Fin) である。

Color in nature のテーマを受けて、自然の色と人工的な色の違いは何かと検討しそのひとつに、同じ色がなく全てが異なっている (all difference) ことを頭に置き、日の入り後空全体が濃い青色に染まる時間帯であるブルーアワーを服飾作品で表現しようとした。ブ



図19 グループ1の作品「BLUE HOUR」

ルーアワーから、街全体が眠りについていくイメージをグループとして持ったため、sleepもキーワードとして取り入れた。リラックスしたシンプルな形のワンピースにソフトな素材を組み合わせ、またオリジナルテキスタイルや藍染の異なる濃さの青色の布をもちいて、自然の中にある青色を表現した。

グループ2のテーマは「Living in Colors」である。制作者は鈴木沙江、中村結菜、本田真悠、矢吹毬衣、Aura Bridger (Hawaii) である。

Color in natureというテーマから、日本でフラダンスを教える女性をペルソナに設定し、ウェディングドレスを制作した。日々活動的に生活しているペルソナに合わせて、クールなイメージのデニムパンツスタイルに、色味も一般的な純白のドレスではなく鮮やかな赤色を使用した。染色には茜染めを使用し、強かでありながらも優しい女性らしさを感じさせる人物のイメージを表現するように工夫した。また、ペルソナの女性が大好きなプルメリアの花を和紙で制作し、装飾した。

グループ3のテーマは「Kawaiola (Water is Life)」である。制作者は石川瑛理奈、藤本めぐみ、林于玲、田村奈美、Wainani Wandt (Hawaii) である。

テーマから日本の自然とハワイの自然をイメージする画像を選び出した。そこから共通点を探した結果、水を連想させるものが挙げられ、Water is life という意味であるKawaiolaというグループテーマに至った。



図20 グループ2の作品「Living in Colors」

素材作りでは、デニム生地を筒に巻きつけて、たくしあげ、しわを寄せてブリーチすることで模様をつけた。これは藍染めのワークショップで学んだ技法をデニムに応用したものである。浮かび上がった模様は水の流れを表現した。また、シーチングを茜染する際にも、折り紙染めの技法を用いて同様に表現した。ケープには泥染めで茜色に染色した和紙を使用している。また、全体のデザインは、ハワイの滝から水が流れる様子を表現し、素材が活きるようなデザインにした。



図21 グループ3の作品「Kawaiola (Water is Life)」

#### (4) 移住と農作業着

ファッションショーが行われた長門市では1975年～1980年をピークに人口が減少し、高齢化率（65歳以上人口比率）も39.7%（H27年）、地域によっては45%以上と年々上昇している。この人口減少・高齢化問題を解決するために、長門市では地域外からのUJIターンの定住化支援政策を行っている。昨年に引き続き、この「移住」という地域の課題解決をテーマに、今回もIターンやUターンで移住してきた人達が着る農作業着という想定でペルソナを設定し、ゼミのメンバーを大学院生（2名）と学部生（3年6名、4年4名）で3グループに分かれて制作した。

1) グループ1のテーマは「ナチュラル&ヘルス」で、メンバーは大学院生の高橋潤一郎と田村奈美である。

ペルソナは地方出身の夫婦で、高校卒業後に故郷とは環境が異なる関西の芸術系大学へ進学。夫の専門は

染色、妻の専門はテキスタイルデザイン。先輩と後輩の二人は在学時からの交際を実らせ、卒業後一年で結婚。それぞれ関西の企業へ専門を活かして就職。妻は結婚を機にSOHOにて仕事を始める。2児を授かるも、小児喘息を患い田舎暮らしを考える。夫の、化学染料ではなく自然素材で染色したいという夢もあり、山口で募集された藍染を利用した地域おこし協力隊へ参加し、移住を決める。現在は藍染めの原料である蓼藍を自ら育てている。つまり、農業をも営み、100%自然素材の染色活動を行っている。当作品は、その畑作業をする時に夫婦で着用するために考案したものである。

今回のペルソナにはモデルとなる夫婦がおり、実際に地域おこし協力隊として山口県防府市の富海にて「藍の郷づくり」における活動（藍の栽培、すくもづくり、染色、藍製品の商品開発・販路拡大）を行い、地域おこし協力隊終了後に藍染め工房「草衣so-i」を開いて活動している大道夫妻である。

作品はテーマがナチュラル&ヘルスという事で、男女ともに染色は草木染めの藍染、素材も天然素材の綿を使用した。藍染は大道竜士が行った。

男性の縫製は山口ファッション&テキスタイル研究所Y-FATYの武永佳奈が行い、2人の共創となっている。シャツのデザインは藍染めで染めた様々な種類の布をパッチワークしたものを使用した。動きやすさを求め、全体的にゆったりとした作りになっている。

女性の作品はデザインに茜染や緑茶染めによる赤やグレーの布も取り入れ、素材はオーガニックコットンを使用した。上着は左右の胸部にポケットを付け、パンツは動きやすいようにパターンを工夫し、膝上は前後左右で4つの部分、膝下は前後左右と前膝部分の5つの部分にパターンを分割して制作している。膝の部分は畑仕事で地面に膝が付く事を想定し、二重構造になっており、曲げ伸ばしに対応するため、ギャザーにしている。

夫婦ということで、ベアルックになるように男女共、パンツの上部をグレー、下部に藍染めの布を使用し、色を揃えた。

2) グループ2のテーマは「ワーキング&ファンクション」で、メンバーは学部生の石川瑛理奈、鈴木沙江、藤本めぐみ、本田真悠、矢吹毬衣、林于玲である。

ペルソナの夫婦は関西の大学時代に自転車サークルで出会い、大学卒業後に結婚した。妻は出版社社、夫はIT企業で働いていたが、夫が29歳の時にフリーに転身。その際、旅行で長門市を訪れ、自然の美しい景色に感銘を受け、2年後に大阪から長門市に移住して



図22 「ナチュラル&ヘルス」

きた。近所に住む農家の方から野菜をおすそ分けしてもらったことから、夫婦で休日に時々畑作業を手伝っている。天気が崩れる事も多い田植えの時期に、雨具として、また、肌寒い時期には防寒具として使用することができる農作業着をデザインした。

農作業着はゼロ・ウェイトのコンセプトの元で考え、直線裁ちを用いて廃棄する部分が少なくなるようにした。ナイロン素材を使用しており、ごわつきをなくすために胸部に切り替えを施した。また、裏側もすっきりさせるためにステッチしている。これらは見た目をスタイリッシュにする役割もある。また、フード部分、袖口、男性の農作業着については裾の部分にゴムを入れた。このことによって、長さの調節ができたり、長靴に裾を入れ込みやすくなったりしている。

ペルソナの趣味であるガーデニングに使用するため、エプロンも提案した。エプロンの上の部分を取り外し、普通のエプロンとしてだけでなく、下は巻きスカートとしても着る事ができる2way仕様になっており、ガーデニングだけでなく、普段着としても使用できる。農作業着、エプロン共にベルトのついたミニバッグがついており、ガーデニング作業時に必要な小物を収納でき、スマートフォンなどが作業中に落ちないようにファスナーで閉じるようになっている。

3) グループ3のテーマは「ハピネス&ジョイフル」で、メンバーは学部生の中村結菜、山本成美、角谷優華、升田有紀である。



図23 「ワーキング&ファンクション」

ペルソナの女性は長門市の農家で生まれ育ち、大学在学中に北欧留学を経験する。そこで感じた豊かな暮らしぶりやナチュラルな食生活、自然と調和したデザインを体感した。現在はUターンで地元、長門市で自然栽培やハーブを育て、全国で販売している。彼女の好みの柄をイメージしてデザインしたオリジナルテキスタイルを使用し、農作業着と販売着の提案を行う。この農作業着から農のある暮らしのハピネスと自然と共生することによる心から感じる喜びを表現している。

作品のテキスタイルデザインは農作業着であるモンペや普段着、インテリアなどに多用に用いられている縞模様(ストライプ)をアレンジしたデザインになっている。ストライプを植物で表現する事で柄の大小で印象を大きく変える事ができ、用途の幅を広げることを目指している。ペルソナに合わせたモチーフ選び、カラーをグループメンバーで検討した。

作品のデザインは農作業着の機能性を持った服にファッション性を新たに加える為にモンペは腰ひもをリボンのように結べるスタイルとサロベットの2way仕様のデザインにした。モンペに合わせるトップスがないといったリアルな声を元に、モンペと同じ生地を使用したシャツをデザインした。袖口はゴムが通してあるためたくし上げやすく、フェイクカフスでお洒落な見た目になっている。ワンピースには異なった向きでストライプを使用している部分がポイントになっている。



図24 「ハピネス&ジョイフル」

(5) mompekkkoと商品開発

企画デザイン研究室では2013年から、おしゃれな農作業着を目指してモンベッコの商品開発を行ってきた。モンベッコは日本で伝統的に使用されてきたもんぺを原型とし、オリジナルに染色した布を用いて商品開発したものである。2014年には企画デザイン研究室のサテライト研究室である有限会社ナルナセバからmompekkkoレーベルを立ち上げ、「mompekkko raita」の商品化を実現し、販売を行っている。毎年縞のデザインやシルエットを変え、改良に取り組んできた。モンベッコの他にサロベッコタイプの「サロベッコ」やツナギスタイルの「ツナギッコ」もある。

今年はAAF2019のテーマでもある、「光の棚田」をイメージしたmompekkko tanadaを発表した。テキスタイルは2018年のmompekkko motonosumiのデザインよりも縞柄の幅を細くした。理由として、太い縞柄は日常に着用するには少し目立ちすぎて合わせにくいという意見があったためである。また生地を裁断する際の柄合わせがしやすいという点でも、細い縞柄の方が比較的無駄がなく使用できる。形はmompekkko motonosumiのシルエットを活用し、丈の長さはMを2cm、Lサイズを2.5cm長くした。色展開は、白、赤、緑、藤色、黒の5色である。生地の織元と縫製は福岡県三井郡大刀洗町にある合資会社ローリングに依頼した。

AAF2019におけるモンベッコのブース販売では、



図25 mompekkko tanada

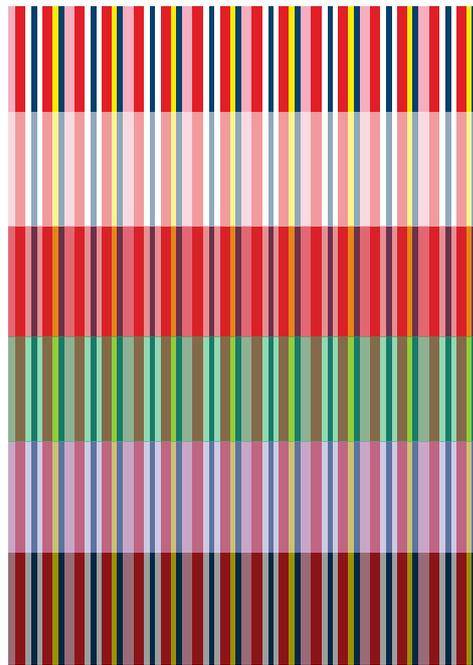


図26 mompekkko tanada テキスタイルイメージ



図27 mompekkko tanada白着用イメージ モデル：安倍昭恵



図 28 mompekkko tanada黒 着用イメージ モデル：我妻マリ



図 30 mompekkko tanada藤色 着用イメージ モデル：はるな愛



図 29 mompekkko tanada緑 着用イメージ モデル：芹那

過去のmompekkkoの種類も含め17着の売り上げがあった。中でも特にmompekkko tanada黒が最も人気であることが分かった。棚田サミットの全国からの参加者が多く購入した。

mompekkkoの商品開発としては今回が最後となるが、今後は有限会社ナルナセバを通してネット販売な

ど、販路拡大やマーケティングにも力を入れていきたいと考えている。2019年からは、山口市のふるさと納税お礼の品の対象にもなっており、福岡や東京などから注文を受けている。山口県内だけではなく全国にもmompekkkoを発信していくきっかけに繋げていきたい。

#### (6) まとめ

これまで、長門市の地域に実際に出向き、地域の産公の方々との出会いや交流を通して地域に根付いた活動を継続して行ってきた。AAFの7年間の集大成として、全国棚田（千枚田）サミットという大きな舞台で発表ができたことは、非常に有意義であったと言える。

今回、ハーブ植えの活動のように耕作放棄地であった棚田を再生、活用する取り組みが少しずつ始まっている。同時に6次産業化へと発展していくことで、地域をアピールするきっかけになり、他の商品との差をつけることも可能である。

ファッションショーにおいては、徳地和紙や藍染を使用した作品制作に取り組み、山口の地域素材としての認知を高め、衣服に活用する新たな可能性も提示できたのではないかとと言える。課題としては商品開発への展開を想定した場合のコスト面が挙げられるが、顧客となるターゲットを設定し、ナチュラル志向の視点から捉えることで需要が生まれるのではないかと考える。

mompekkkoの商品開発では6年目となり、シルエットや色展開も含めこれまで様々な実験、改良を行ってきた。御田植祭や収穫祭など、年々多くの人に履いていただく機会も増え、その場の一体感や体験価値を生み出すことができた。今後もモンベッコが定番として残っていくものにしていきたい。

今回のmompekkkoの販売については例年よりも売り上げが伸び、全国から棚田サミットに参加された方々にも販売できたことは大変貴重な機会となった。また、棚田サミットでの事例発表を行ったことで、モンベッコ開発の背景も伝えることができた点は非常に画期的であった。

AAFを続けていく中で、地域資源活用の可能性をファッションを通して発信していくことで有効的な手法が得られた。しかし、地域活性化に繋げるためには一時的な取り組みで終わるのではなく、持続可能な方法が求められるのではないかと考える。



図14 アグリアート・フェスティバル2019フィナーレ

## 終わりに

以上述べてきたように、山口県防府市、山口市などにおいて地域の伝統手工芸や産業は、現在、若者の手によって再生中である。染織工芸のみならず、蜻壺を陶器で製造する産業も消滅寸前で、ワークショップに他地域から参加した若者によって継承されつつある。

東京への一極集中という流れも決して止まってはいるが、地域創生の政策によって、地域の伝統手工芸はかろうじて息を繋げている。

上記でレジリエンスを再生する力と定義したが、今、静かに地域資源は新たな局面を迎えている。山口県では山口アーツ&クラフツという見本市的な販売を伴う、展示会が14年間継承されてきている。ここでは、審査を伴っており、全国からの参加も多いが、地域で活動する個人やグループがチャレンジするという刺激の場として機能している点で高く評価できる。

第1章で都会の若者が自分の出自となんら関係のな

い地域に地域おこし協力隊として入って、公務員としての仕事の卒業後、その地域に関わりがある文化、産業、手工芸の継承、再生に貢献するために起業をしている現状と今後への可能性について述べた。

また、筆者の研究グループは長年の間に山口県内の長門市、山口市、防府市、岩国市、柳井市、萩市などに入って、レジリエンスの触媒になって活動をしてきた。

これらの活動は外者が故に持ちうる地域資源に対する客観的な視点、魅力を発見する力、地域愛からくる再生へのアイデアなどがレジリエンスを高めていると言える。

また、海外の人々の地域工房での活動は、地域内外から工房への他者の視点、あるいは異文化からの視点が向けられることで、地域での工房の存在感が高まると考える。今後は具体的なインバウンドのデスティネーションとしてどのように出会いを作っていけるかなどが問われる。

一方、徳地に見られるように、地域内での後継者の役割は大きい。個人と地域コミュニティの双方の力で、徳地和紙のレジリエンスは高まっている。それは、外からきた力とのコラボレーションが生まれて、インバウンドデスティネーションとしての可能性が高まっているからである。

SGFWS2019の一部のワークショップを実施した工房については、東芝国際交流財団のネット上の冊子であるJapan Insightにおけるラップランド大学名誉教授のマルヤッタ・ヘイッキラ・ラスタス Marjatta Heikkilä-Rastas の記事の中に、詳細が紹介されている。連絡先なども記されている<sup>(注10)</sup>ので今後、出会いが生まれ、よいワークショップの求めが海外から来ることを期待したい。

また7年間取り組んできたAFFでは、地域の数え唄と踊りの再生が行われた。高齢者と小学生がコラボレーションすることで、伝統が継承される機会となったに違いない。筆者の研究室が新しい早乙女の衣装をデザインしてモデルと一緒に数え唄のパフォーマンスに参加できたことは、伝統を相対化する役割を果たした。

さらに、炭焼きの商品開発を通じて生まれた地域コミュニティは、地域住人とUターンの人々によるコラボレーションであることが理解できた。そこにゼミ生による若者の視点からの商品開発に貢献できたことは意義があった。

また、移住をテーマにして、地域内外の人の両面の

立場から、長門の宇津賀地区や向賀津具半島の力を内外にプレゼンテーションをすることができた。

同時に、農ガールコレクションは地域の恒例の行事として認識されて、多くの市民が継続的に鑑賞者として来ていることは、一定の評価をすることができる。

メッセージ性と娯楽性を合わせもつこのイベントは一旦7回で終了した。

今後はさらに地域のレジリエンスを高めるために、地域の伝統文化のみならず、SDGsにも注目し、農業とも関わりつつも、地球規模の問題を地域でどのように活動できるかを検討し、新たな地域の個性や誇りの創出ができるような活動を外者の視点から地域のレジリエンスに貢献していきたいと考えている。

注1 鞍田 崇 『民藝のインティマシー～「いとおしさ」をデザインする～』 明治大学出版会、2014、176-177頁。

注2 枝廣 淳子 『レジリエンスとは何か～何があっても折れないところ、暮らし、地域、社会をつくる』 東洋経済新報社、2015年。

注3 中川 真 『アートの力』 和泉書院、2013年。

注4 株式会社気仙沼ニッティング（代表取締役 御手洗瑞子）を指している。この会社は気仙沼を拠点とし、手編みの商品を注文生産している会社である。2012年6月にほぼ日刊イトイ新聞で震災支援のプロジェクトとして始まり、2013年6月に株式会社として独立した。

注5 枝廣 淳子 前掲書、14頁

注6 枝廣 淳子 前掲書、3頁

注7 中川 真 前掲書、99～105頁

注8 中川 真 前掲書、173～195頁

注9 日本民藝協会「民藝」の趣旨－手仕事への愛情 <http://www.nihon-mingeikyokai.jp/about/purpose/> (2019/12/25取得)

注10 “Meeting Local Crafts in Yamaguchi,” Japan-Insights Exploring Expert Experiences, [https://topics.japan-insights.jp/Public/pdf/japan-insights\\_jp/topics/JIN\\_KimonoOrigami.pdf](https://topics.japan-insights.jp/Public/pdf/japan-insights_jp/topics/JIN_KimonoOrigami.pdf), 25 Dec 2019

## 謝辞

当研究の遂行に当たり、多くの皆様の協力を得た。アグリアート・フェスティバル2019開催については、共同研究者の安倍昭恵氏、受託研究を依頼した長門市、研究創作を支えた山口県立大学の前川剛志理事

長、河村邦彦事務局長他、またスーパーグローバル・ファッションワークショップ2019については、公益社団法人東芝国際交流財団の助成を得ており、特に白井純理事にはご協力を得た。また、ワークショップ開催に関して柳井縞の会、サロン・ド・エミールの西脇末美氏、草衣so-i主宰の大道竜士氏と千々松和紙工房主宰の千々松友之氏にご指導を頂いた。また、海外からワークショップに参加したラップランド大学のアナ・ヌウティネン教授とハワイ大学マウイ校のシェリル・マエダ准教授には学生指導や多くの示唆を頂いた。

また多くの皆様にご支援、ご指導を賜った。この場をお借りしてすべての皆様に深くお礼と心からの感謝を申し上げます。

## 図版 撮影者リスト

図版1～15、26 企画デザイン研究室

図版16、19～25、27～31 竹島良

図版17、18 岡田武士

## 参考文献

柳宗悦 『民藝とは何か』 講談社、2019年。

柳宗悦 『工藝の道』 講談社、2018年。

柳宗悦 『手仕事の日本』 岩波書店、2018年。

水谷由美子・安倍昭恵・武永佳奈・水津初美共著「モンベとサルツパカマをリデザインした農作業着の服飾デザイン：『農業スタイルコレクション2013in長門油谷with会津若松』を事例として」『山口県立大学学術情報』第7号、山口県立大学、2014。

水谷由美子・甲斐少夜子・小田玲子共著「地域資源を活かした農ガールファッションの商品開発とサービスデザイン：アグリアート・フェスティバル2014『大地の心をきく』を事例として」『山口県立大学学術情報』第8号、山口県立大学、2015。

水谷由美子・甲斐少夜子・小田玲子・原田章子共著「地域創生への服飾デザインからの挑戦：長門市油谷の棚田ブランディングと農作業着モンベッコの商品開発を事例として」『山口県立大学学術情報』第9号、山口県立大学、2016。

水谷由美子・小田玲子・荒木麻耶共著「産学公連携

による農作業着モンベッコとツナギッコの商品開発：  
アグリアート・フェスティバル2016を事例として」  
『山口県立大学学術情報』第10号、山口県立大学、  
2017。

長門市定住支援  
<https://www.nagatoteiju.com> (2020/01/6取得)

水谷由美子・甲斐少夜子・原田章子・荒木麻耶・高  
橋潤一郎・松浦奈津子・DOZAN11・三木学共著「長  
門市棚田ブランディングと地域資源を活かすファッ  
ションの共創：アグリアート・フェスティバル2017と  
SGFWS2017を事例として」 『山口県立大学学術情  
報』第11号、山口県立大学、2018。

水谷由美子・高橋潤一郎・下川まつゑ共著「デザイ  
ンペルソナと服飾デザイン～スーパーグローバル・  
ファッションワークショップ2018とアグリアート・  
フェスティバル2018を事例として～」 『山口県立大  
学学術情報』第12号、山口県立大学、2019。

#### 参考URL

－とくち手すき和紙－千々松和紙工房  
<https://tokudiwashi.jimdofree.com>(2020/01/6取得)

やない西蔵－柳井市ホームページ  
[https://www.city-yanai.jp/site/kanko-shisetsu/  
yanainishigura.html](https://www.city-yanai.jp/site/kanko-shisetsu/yanainishigura.html) (2020/01/6取得)

サロン・ド・エミール  
<https://www.emile-group.jp> (2020/01/6取得)

Japan-Insights 東芝国際交流財団  
[https://www.toshibafoundation.com/jp/japan-  
insights.html](https://www.toshibafoundation.com/jp/japan-insights.html) (2020/01/6取得)

全国棚田（千枚田）連絡協議会  
<https://tanada-japan.com> (2020/01/6取得)

長門広域都市圏の現状と課題  
[https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a18400/city-  
plan/nagato-zentai/apd1\\_4\\_2006020914111457.pdf](https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a18400/city-plan/nagato-zentai/apd1_4_2006020914111457.pdf)  
(2020/01/6)

長門市地域公共交通計画 第1章 長門市の地域特性  
－長門市ホームページ  
[https://www.city.nagato.yamaguchi.jp/uploaded/  
attachment/7585.pdf](https://www.city.nagato.yamaguchi.jp/uploaded/attachment/7585.pdf) (2020/01/6取得)

服飾デザインと地域資源のレジリエンス～スーパーグローバル・ファッションデザインワークショップ2019とアグリアート・フェスティバル2019を事例として～

資料：「アグリアート・フェスティバル2019」プログラム

第25回全国棚田(千枚田)サミット連携事業

光の棚田

AGRI-ART FESTIVAL 2019

ルネッサながと  
2019.10.13 Sun  
14:30 開場 15:00 開演

企画・運営 安倍 昭恵 水谷 由美子  
山口県立大学企画デザイン研究室  
主催 アグリアート・フェスティバル2019実行委員会  
共催 長門市 山口県立大学  
やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会  
公益財団法人東芝国際交流財団

01

Agri - Art  
Festival  
Archive

2013

農業スタイルコレクション 2013 in 長門湯谷 with 会津若松



2014

アグリアート・フェスティバル

大地の心をきく



2015

和敬清寂～夏は涼しく～



2016

自然との対話



2017

水の力 The Force of Water



2018

リアル・アグリ～風と遊ぶ～



2019

光の棚田

## 02

### ご挨拶



安倍 昭恵 来賓

農業が果たす役割の重要性和魅力に感銘を受け、私が農作業に取り組んだのは8年前のことでした。自然と向き合い農作業がもたらす奥深さとその素晴らしさに触れる中で、若い女性にも農業に関わってほしいという思いから、山口県立大学企画デザイン研究室と共同し、地元の協力を得て2013年に農ガールコレクションを開催し、今年で7年目を迎えました。自らモデルとなり、オリジナルなもんぺ、mompekkko姿でランウェイにあらせて頂いています。日本の棚田は近年の高齢化や後継者不足に伴い耕作放棄されるなど、大きな問題となっています。棚田を守る活動は日本の原風景及び農業を守るだけでなく、地域活性化、生物多様性および生態系の保全にも貢献できます。第25回全国棚田サミットが棚田の大切さと農業の魅力を感じさせてくれるきっかけになればと願っています。



前川 剛志 アグリアート・フェスティバル実行委員会理事長(公立大学法人山口県立大学理事長)

第7回を迎える今年のアグリアート・フェスティバル2019は、第25回全国棚田(千枚田)サミットの一環として行なわれます。今まで主に農ガールコレクションを中心に、地域の農業振興や農業文化の創造を目指すために、シンポジウムやコンサート等を含め、幅広い視点からこの事業を継続して参りました。長門市には棚田百選に選ばれた東後畑の棚田が日本海に面して広がっています。当事業はこの美しい風景を愛でながら、ファッションで地域の若者や都市部の人々に地域に興味をもって頂くことを意図して、長門市、山口県立大学企画デザイン研究室およびその共同研究者である安倍昭恵氏(内閣総理大臣安倍晋三夫人)が、長年この事業を推進し、共創としてmompekkko(おしゃれなもんぺ)を開発してきました。ご理解とご支援頂いた関係各位にこの場をお借りしてお礼申し上げます。



大西 倉雄 25回全国棚田(千枚田)サミット長門市実行委員会会長/長門市長

このたび「アグリアート・フェスティバル2019」が安倍昭恵内閣総理大臣夫人をはじめ、多くの方々のご尽力により、ここ長門市で盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。今回は、第25回全国棚田(千枚田)サミットとのコラボ開催となり、長門の棚田を全国発信することはもとより、ファッションを生かした新たな農業者の取込みにお手伝いを頂きありがとうございます。このサミットにおいては、棚田の魅力を再発見! ~美しいふるさとを未来へ~をテーマに、全国の棚田地域の皆さんと情報を共有しながら、地域がもっと活性化するよう大会を盛り上げていきたいと思ひます。本フェスティバルのご成功と、本日お集まりの皆様方のご健勝を祈念申し上げ、お祝いのことばとします。



水谷 由美子 アグリアート・フェスティバル実行委員長(山口県立大学国際文化学部長)

今年のテーマは「光の棚田」です。共同研究をしている安倍昭恵氏、内閣総理大臣安倍晋三夫人と企画デザイン研究室のスタッフは、長門市やNPOゆや棚田景観保存会の皆さんが再生させた棚田でハーブ植えをしました。2013年以来開発されて来た農作業着mompekkkoを地域の皆さんにも履いて頂きました。海に映える光が大地に照り返し、キラキラした棚田に繡柄の花が咲いた時間でした。現在では東後畑の棚田は美味しい自然栽培米の拠点としての位置を築かれ、今年からはジン作りが目指されハーブの郷となりつつあります。耕作放棄地がますます開拓され、かつての美しい棚田の景観が再生されることを祈っています。この活動は山口県内の伝統工芸の発掘と創造および発信をも目指して、海外の大学からゲストを招きワークショップをしてきました。国際交流によって外の眼から地域の魅力を服飾デザインで表現しています。今年はファッションと農業の共創の集大成の年です。最後に、本企画の意義を理解してボランティアに参加して下さい多くの皆様に心からお礼申し上げます。

03

# Super Global Fashion Work-Shop

## 2019

supported by Toshiba

### ‘Color in Nature’

～ 地域伝統工芸アトリエをインバウンドのデスティネーションにする！～

SGFWS は世界の大学からゲストを迎えて山口県立大学および山口県内の伝統工芸のアトリエで実施するファッションのワークショップです 2016 年から始まり今年で 4 回目を迎えました。今回は ‘Color in Nature’ をテーマに、山口県立大学 (15 名)× ラップランド大学 (2 名)× ハワイ大学マウイ校 (3 名) が参加しました。約 1 週間のワークショップは徳地手漉き和紙 (千々松和紙工房、山口市)、天然灰汁発酵による藍染め (草衣 so-i、防府市富海)、柳井縞の染織 (やない西藏、柳井市)、さらに着物の着付け (サロン・ド・エミール、下松市) などのアトリエと山口県立大学 (山口市) で行われました。伝統工芸は農業から始まり、自然の原料が加工され、自然な色が生まれます。サステナブルな伝統から多くを学び、古くて新しい価値を体験できました。さらに、このワークショップを通じて地域で伝承されて来た伝統工芸アトリエを海外からのハイエンド・トラベルのデスティネーションにすることも目指しています。研究創作の視点からは、今回からの新しい服飾デザインの試みとしてグループのリサーチ、テーマ設定、キーワード、キーピクチャー、ペルソナ、ムードボード、スケッチまでの作業を、ゲストが来日する前にインターネットや Skype など電子メディアを用いて進めました。国際交流から生まれる斬新なデザインをお楽しみ下さい。

水谷 由美子  
企画・ディレクションリーダー



私共公益財団法人は、設立以来 30 年に渡り国際交流を通じた「世界からの対日理解の促進」に取り組んでまいりました。海外で活躍する日本文化、歴史、芸術、社会の研究者への研究助成、成果発表支援を活動の中心としてきました。近年は「海外の研究者と日本の研究者による新たな価値創造活動」への支援も推進しており、ここ数年山口県立大学が山口の伝統文化の海外普及を目的とするスーパーグローバル・ファッションワークショップの応援を続けています。今年は、アグリアートとの連携も一段と深める興味深いプログラムです。国内外の若者達が共同で、どのような研究発表をするかとても楽しみです。

白井 純  
公益財団法人東芝国際交流財団理事

### Co - Direction



Cheryl N. Maeda

Aloha from the University of Hawaii Maui College, Fashion Technology Program. The students and I are so privileged and grateful to be invited to participate in the Super Global Fashion Workshop for the third year. Mahalo nui loa to Mizutani Sensei for organizing this wonderful event and experience for all the students.  
Cheryl N. Maeda, Associate Professor and Program Coordinator



Ana Nuutinen

Ana Nuutinen, Ph.D. (Fashion) is a professor in the Faculty of Art and Design at the University of Lapland, Finland. She has a background in craft research at the University of Helsinki and in fashion design and research at the University of Art and Design Helsinki (nowadays Aalto University). Her design thinking is guided by futures research, artistic work and handicraft. The three intersecting viewpoints specify her design thinking to concept design, to explorative product development and to design of pioneer products.

## アトリエ紹介

スーパーグローバル・ファッションワークショップ 2019 では服飾デザインのクリエイションだけでなく、今回ワークショップを実施させて頂く伝統工芸の工房に海外のゲストが参加してインバウンドのデスティネーションとなるように、手法やコミュニケーションの方法も研究されています。主催のやまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会はここに掲載されている山口県内の工房やその他の工房も支援して行きたいと考えています。さらに専門家やハイエンドなインバウンド向けの受け入れなどの可能性も探っていく予定です。

### 草衣 so-i

代表：大道 竜士  
住所：防府市富海 2666  
TEL：080-5480-6264  
mail：daidoryuji@gmail.com  
営業日：木・金・土【不定休】  
☎ so...i

山口県海沿いのまちにある藍染工房です。自然に囲まれた暮らしの中で天然藍のみを使用して、暮らしの道具を制作しています。

築 90 年の古民家を改装。土間に埋めた藍がめで日本の伝統的な「灰汁醗酵建て」の藍染を体験できます。

藍染WS (要予約)  
所要時間 2 時間  
手ぬぐい 2200 円～  
各種ショール 5500 円～

お客様が素材を持ち込んでのワークショップも可能です。着古した衣服、制作用の生地、糸などご相談ください。お見積り致します。



### サロン・ド・エミール

代表：西脇 未美  
住所：下松市美里町 2-6-16  
TEL：0833-45-1505  
mail：emile.kirei.5@gmail.com  
定休日：毎週月曜日  
第1・第3日曜日  
☎ eml.87

あなたの綺麗をトータルプロデュース。ヘアメイク、着付け、フェイシャルエステまで充実、数々のコンテストで賞を取ったスタッフが、あなたの綺麗のお手伝いを致します。「貸衣裳シャラン」「スタジオ 3B」と合わせて、サロン・ド・エミールは、衣裳選びから写真撮りまで出来る美容室です。

貸衣裳シャランでは、婚礼衣裳、成人式振袖、卒業式袴、子供ドレス、七五三衣裳等様々な衣裳を豊富に取り揃えています。着付けの指導も行っておりますので、お気軽にご相談ください。

海外からのインバウンド観光として着付け体験をお待ちしています。



### やない西蔵

代表：柳井市商工観光課  
住所：柳井市柳井 3700-8  
TEL：0820-23-2490  
営業時間：9:00-17:00  
休館日：火曜日  
(祝日の場合は翌日)  
年末年始

やない西蔵は、大正時代末期に建築された木造平屋建・白壁土蔵造りの建物で、昭和 55 年頃までは醤油蔵として使用されていましたが、平成 10 年に所有者よりご寄贈を受け、改修工事の後、平成 13 年 4 月にギャラリー及び体験工房として複合型観光施設に生まれ変わりました。

柳井織機織体験、染色体験、金魚ちょうちん製作体験などが出来るほか、ギャラリーや休憩所の機能も備えています。詳しくは HP をご覧ください。

英語によるボランティアガイドもできますので、別途ご相談ください。



### とくち手すき和紙 千々松和紙工房

住所：山口市徳地島地 613-1  
TEL：0835-54-0328  
mail：tetuwasi@c-able.ne.jp

英語による専門的なご案内可能です。

江戸時代には「関西一」と称された、「徳地手すき和紙」を守ってきたのは、職人の技術と山口市徳地の美しい空気と清らかな水。山口県指定無形文化財徳地手漉き和紙技術保持者・千々松清次郎氏に師事し、60 年以上生産に従事した千々松哲也氏をはじめ、その技を受け継ぐ数名の職人が生産に励んでいます。

【受付期間】4 月～12 月中旬  
ミニ紙漉き体験コース  
所要時間 約 1～2 時間

卒業証書製作コース  
徳地和紙の歴史や和紙作りの工程を学び、自らの手で卒業証書を漉きます。思い出になると好評いただいております。



04

Program

プロローグ 挨拶

前川 剛志 アグリアート・フェスティバル実行委員会理事長（公立大学法人山口県立大学理事長）

白井 純 公益財団法人東芝国際交流財団理事

安倍 昭恵 来賓

ファッションデザイン 天津 憂（アートディレクター）

シューズデザイン 館鼻 則孝（アーティスト）

柳居 俊学 特別来賓（山口県議会議長）

齋藤 宗房 特別来賓（山口トヨタ自動車株式会社 社長）

マウンテンマウスライブ

三百六十五歩のマーチ 光の棚田

農ガールコレクション 生命の循環 ‘Circlation of Life’

PROLOGUE

「日の光」金子みすゞ 朗読：安倍 昭恵

PART 1 光の棚田

Amaterasu or Demeter	日の出	夜明け	光の神	田の神
水谷 由美子	下川 まつる	下川 まつる	山本 成美	山本 成美
model：安倍 昭恵	model：我妻 マリ	model：芹 那	model：坂上 留美	model：瀧谷 奈々

ただ、ここに	たたずんで	光	Repetition	Brilliant
鈴木 沙江	鈴木 沙江	藤本 めぐみ	矢吹 穂衣	角谷 優華
model：加藤 瑞葉	model：王 曾芝	model：郡 さやか	model：津村 実奈	model：榎本 由里香

Reflection	Sunbeams	花と海	passage of time
本田 真悠	升田 有紀	中村 結菜	石川 瑛理奈
model：斗光 アカリ	model：津村 真衣	model：古澤 萌 井出 乃阿	model：福島 優季 中田 帆南

PART 2 海外ゲスト作品

Riite (A thin layer of ice) Emma Maria Johanna Napar model：榎本 優花 中牧 和香子 藤本 めぐみ 服飾デザイン：山本 成美 角谷 優華 升田 有紀	Mariposa (butterfly) Aura Bridger model：稲葉 皐	Wailele (waterfall) Wainani Wendt model：深川 絵里
---	---	--

PART 3 スーパーグローバル・ファッションワークショップ SGFWS2019

‘Color in Nature’

BLUE HOUR Emma Maria Johanna Napar 山本 成美 角谷 優華 升田 有紀 高橋 潤一郎 model：張 樹琳	Living in Colors Aura Bridger 鈴木 沙江 中村 結菜 本田 真悠 矢吹 穂衣 model：人見 歩希	Kawaiola (Water is Life) Wainani Wendt 石川 瑛理奈 藤本 めぐみ 林 于玲 田村 奈美 model：岩瀬 美月
--	---	--

## PART 4 移住者と農作業

### 〈ナチュラル&ヘルス〉

田村 奈美  
高橋 潤一郎  
model: 王 喆  
高橋 潤一郎

地方出身の夫婦は、高卒後に故郷とは環境が異なる関西近辺の芸術系の大学へ進学する。主人の専門は、染色。妻の専門は、テキスタイルデザイン。先輩と後輩の2人は在学時よりの交際を实らせ、卒業後一年で結婚。それぞれ関西の企業へ専門を活かして就職。妻は結婚を機に SOHO にて仕事を始める。2 児を授かるも、小児喘息を患い田舎暮らしを考える。主人の化学染料ではなく、自然素材で染色したいという夢もあり、山口で募集された藍染を利用した地域おこし協力隊へ参加し移住を決める。現在は原材料も畑から自身で耕し、100%自然素材の染色活動を行なっている。当作品は、その畑作業をする時に夫婦で着用するために考えたものである。

### 〈ワーキング&ファンクション〉

鈴木 沙江 矢吹 穂衣  
藤本 めぐみ 林 于玲  
石川 瑛理奈 本田 真悠  
model: 岡本 望希  
浅井 楓  
池田 千穂美

2 人は大学時代に自転車サークルで出会い、結婚した。旅行で長門市を訪れ、自然の美しい景色に感銘を受け、大阪から移住してきた。近所に住む農家の方から野菜をおすそ分けしてもらったことから、休日に時々畑作業を手伝っている。天気が崩れることも多い田植えの時期に、雨具として、また、肌寒い時には防寒具として使用することができる農作業着をデザインした。エプロンは上の部分を取り外すとスカートとしても着ることができる 2way 仕様になっている。3 点ともベルトのついたミニバックがついているため、作業時に必要な小物を収納できるようになっている。

### 〈ハピネス&ジョイフル〉

中村 結菜 山本 成美  
角谷 優華 升田 有紀  
model: 小山田 風沙  
中田 久智美

長門市の農家で生まれ育った彼女は大学在学中に北欧留学を経験する。そこで感じた豊かな暮らしぶりやナチュラルな食生活、自然と調和したデザインを体感した。現在は地元である長門市で自然栽培米やハーブを育て、全国で販売している。彼女の好みの柄をイメージしてデザインしたオリジナルテキスタイルを使用し、農作業着と販売着の提案を行う。この農作業着から農のある暮らしのハピネスと自然と共生することによる心から感じる喜びをお届けできたらと思います。

## PART 5 mompekk history

2016 cosmo	2016 ツナギッコ	2015 サロベッコ
model: 林 俊宏	model: 中牧 和香子	model: 榎本 優花

## PART 6 mompekk tanada 2019

デザインディレクション: 水谷 由美子	model: 中川 晏繪
テキスタイルデザイン: 企画デザイン研究室	藤本 めぐみ
服飾デザイン・モデリング: 下川 まつ彥	井上 かみ
プロダクト: 合資会社ロオーリング	和田 あいこ
	大西 倉雄

### ショートトークショー

- 1 宇津賀半島の棚田のある生活の未来について  
安倍 昭恵 井上 かみ (百姓庵おかみ) 和田 あいこ (おもてなしプロジェクトチーム)  
モデレーター: 水谷 由美子
- 2 ゲストコーナー  
安倍 昭恵 我妻 マリ はるな 愛 芹 那  
モデレーター: 水谷 由美子

### フィナーレ

05

Guest Profile



**我妻 マリ**  
1968年、資生堂のイメージモデルとしてデビュー。70～80年代にかけ広告や雑誌、またイヴ・サンローランやジャンシイのオートクチュールモデルを務め、パリ、ミラノ、NY など世界的

に活躍。モデルとしての粋を越え、パフォーマー、ファッションショーのスタイリングやディレクション、プロデュース業も出がける。圧倒的な存在感で、多くのファンに支持されている。



マウンテンマウス周防大島出身の兄”中谷昌史”と妹”中谷愛美”の兄妹ユニット。2001年7月「DA DA DA」でCDデビュー、山口県・広島県・岩手県・宮城県を中心に音楽活動を行う。防長バス・KRY・ハ

ウジングサイト・サファリランド・竜崎温泉のテレビCMソングを制作。2014年5月、CD「愛しき人よ」をリリース。2015年に山口、2017年に北海道北竜のそれぞれふるさと大使に就任。



**はるな 愛**  
アイドル松浦亜弥のコンサート音源を流し口パクで完コピする「エアあやや」で大ブレイク。以後ニューハーフタレントとしてバラエティ番組に多数出演。2008年にはCDデビューも果たし、

韓国ガイドブック・写真集・コミックも発売するなどマルチに活躍。タイで行われた「ミスインターナショナルクイーン2009」で世界第1位となる。タレント活動をしなが、パーやお好み焼き店など3店舗の経営も行う。2016年にはニューヨーク公演を成功させた。



**井上 かみ**  
福岡大学卒。2004年結婚を機に長門市に移住、百姓庵を創業。2007年より『百姓の塩』の製造販売開始。2016年に長門で行われた日露首脳会議では晩餐会にも供された。2018年6月には日

経ランキングで、世界四千社中2位に選ばれた。NPO法人つなぐ副理事長。山口銀行油谷支店内に、スペインバル Dining Bar Zen をオープンしました。ぜひ、いらしてください！



**芹 那**  
2009年、SDN48のメンバーとしてデビュー。SDN48とはSaturday Nightの略で、土曜日の夜にAKB48劇場で公演を行うことに由来している。以後、CM・バラエティ・ドラマ・映画・舞

台と活動を広げる。趣味は、フォークギター、ティディヘア作り。2019年8月にSDN48結成10周年を記念し、一夜限りで魅惑のガーター公演が開催された。

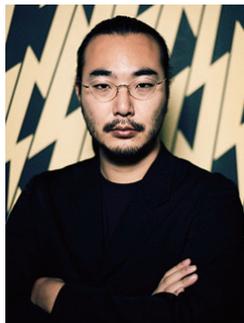


**和田 あいこ**  
1972年生まれ。高校卒業後に動物医学やトリミングを学びに上京、後に大分のペットショップに勤務。子育てを機に帰郷。港近くの借家を借り、雑貨屋を始める。事業と子育てをしなが、デザイ

ナー業を開始。近年は道の駅のディスプレイやパッケージデザインに携わる。今は日本海を望む絶景棚田を花壇にする計画を立ち上げ、世界にたった一つの新しい農業の形に挑み、観光資産を生み出し、交流人口を増やす活動を行う。

06

Guest Artist



**舘鼻 則孝**

1985年、東京生まれ。歌舞伎町で銭湯「歌舞伎湯」を営む家系に生まれ鎌倉で育つ。シュタイナー教育に基づく人形作家である母の影響で幼少期から手でものをつくることを覚える。東京藝術大学では絵画や彫刻を学び、後年は染織を専攻する。遊女に関する文化研究とともに日本の伝統的な染色技法である友禅染を用いた着物や下駄の制作をする。近年はアーティストとして、国内外の展覧会へ参加する他、伝統工芸士との創作活動にも精力的に取り組んでいる。2016年3月には、仏カルティエ現代美術財団にて人形浄瑠璃文楽の舞台を初監督「TATEHANA BUNRAKU: The Love Suicides on the Bridge」を公演した。作品は、ニューヨークのメトロポリタン美術館やロンドンのヴィクトリア&アルバート博物館など、世界の著名な美術館に永久収蔵されている。

07

Staff Profile



天津 憂

衣裳デザイナーを経て、単身 New York へ。アメリカ最大のコンペ Gen Art で 2 年連続グランプリ受賞。パターンメーカー、デザイナーとして務め、同時期にセレブの衣裳を担当。帰国後、株式会社 212 を設立、レディース、メンズ共に展開。Mercedes-Benz Fashion Week TOKYO で DHL Award 受賞。2014 年 Hanae Mori manuscript デザイナーに就任し、2016 年に Hanae Mori のクリエイティブディレクターに就任。企業、イベントなどのユニフォームデザイン。2017 年 MAF 展にて経済産業大臣賞受賞、内閣総理大臣賞受賞。2019 年 G20 OSAKA SUMMIT にて総合演出として KABUKI を披露。ラグビーワールドカップ 2019 オープニングセレモニーにパフォーマーの衣裳演出。

企画・運営



安倍 昭恵

聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て 1987 年安倍晋三氏と結婚。趣

味は、ランニング、ゴルフ、お米づくり。2006 年から山口県立大学企画デザイン研究室と共同開発を開始し、2013 年からファッション創造による農業振興および地域活性化の活動を継続的に実施している。2018 年から山口県立大学院国際文化学研究科非常勤講師。



水谷 由美子

アグリアート・フェスティバル実行委員長。三重県生まれ。お茶の水女子大学修了。ヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）客員教授（2002 年）。山口の地域資源を活かし、服飾デザ

インを通して、地域のブランディングや商品開発について産学公連携による研究創作及びフィンランドのラップランド大学やハワイ大学マウイカレッジとの共同研究を行う。また、サービスデザイン手法を服飾デザインに取り入れ、サステイナブルなデザインアプローチを行う。



企画デザイン研究室

山口県立大学 国際文化学部 文化創造学科

4 年 石川 瑛里奈・鈴木 沙江・中村 結菜・山本 成美

3 年 角谷 優華・藤本 めぐみ・本田 真悠・升田 有紀・矢吹 穂衣・林 于玲

山口県立大学大学院 国際文化学研究科 修士

2 年 下川 まつゑ・高橋 潤一郎・松浦 奈津子

1 年 田村 奈美

舞台



田村 洋

作曲家。山口県立大学名誉教授。服を着ていない人間はいない。服飾文化が人類の歴史を華やかに彩っている。山口県立大学のファッションショーの音楽を初回から担当しています。音楽がファッ

ションを彩る一部になれば幸いです。



REI・KO

青山学院大学文学部英米文学科卒。在京中、東京キッドブラザーズのミュージカルなどの振付を担当。プロのダンサー・舞台俳優として数多くの舞台・TV に出演。帰山後は地域発信型舞台を手

掛け、山口ゆめ花博での明治 150 年記念式典プロローグでは、ミュージカル「志を繋ぐ者たち〜継れ、新たななり」の演出の他、現在、映画『こどもしよくどう』サントラ収録曲『地球子供食堂』（音楽：Castle in the Air）の振付を担当。

08

Staff

総合ディレクター / 服飾デザインディレクション  
水谷 由美子

企画・運営  
安倍 昭恵

作曲 / 音楽監督  
田村 洋 (山口県立大学 名誉教授)

舞台 / 照明 / 舞台美術  
株式会社やの舞台美術

ステージング  
REI・KO/Kayo (Studio Ray/ リル・レイ・ダンススタジオ)

ヘアメイク  
TAKAKO ビューティークリエイター (株式会社ファミリー TAKAKO)  
西脇 未美 / 三牧 弘子 / 八木 香保里 (山口国際美容文化研究所長 / 着付け師 / メイクアップアーティスト)  
海井 美紀 / 鴻上 藍・中嶋 董・鈴木 祐実歌・中林 歩結 (東亜大学非常勤講師 / 学生)  
渋谷 大・安森 恵梨・井町 亜姫・村田 裕美 (パーマハウスいわの)  
横沼 祈 (メイクアップアーティスト)

映像撮影 山口メディア研究所	写真撮影 竹島 良	演出補佐 石川 瑛里奈・矢吹 穂衣	学生リーダー 山本 成美
MC 渡壁 歩未 (山口県立大学エトワール放送局)	グラフィックデザイン 鈴木 沙江	ブースコーディネーター 下川 まつ丞	

運営スタッフ  
石川 瑛理奈・鈴木 沙江・中村 結菜・山本 成美  
角谷 優華・藤本 めぐみ・本田 真悠・升田 有紀・矢吹 穂衣・林 于玲  
田村 奈美・下川 まつ丞・高橋 潤一郎・松浦 奈津子  
(以上・山口県立大学企画デザイン研究室)

スタッフ  
谷村 海璃・秋元 彩花・森崎 香奈・小西 央恵・渡壁 歩未・宗田 望里  
(以上・山口県立大学エトワール放送局)  
石田 彩夏・中村 舞美・内藤 一葉・大村 まゆ・近藤 綾乃

協力  
【アグリアート・フェスティバル2019】  
合資会社ローリング / 荒川 祐二 (作家) / NPO 法人ゆや棚田景観保存会

【スーパーグローバル・ファッションワークショップ SGFWS2019】  
山口県立大学 / University of Hawai'i Maui College / University of Lapland  
とくちすき和紙千々松和紙工房 / やない西蔵 / 草衣 so-i (大道竜土) / サロン・ド・エミール末武店 (西脇未美)  
河村 邦彦 (アグリアート・フェスティバル実行委員会理事、山口県立大学事務局長)  
楠藤 幸雄・新造 里奈子 (山口県立大学経営企画部長・主事) / 畔津 忠博 (山口県立大学国際文化学部准教授)

主催 アグリアート・フェスティバル2019 実行委員会  
共催 やまぐち国際・地域文化国際フォーラム実行委員会  
長門市 山口県立大学  
公益財団法人東芝国際交流財団  
協力 山口朝日放送株式会社 / 株式会社リバース  
協賛 東京愛宕ロータリークラブ

株式会社マーカス アセット マネージメント  
〒106-0032 東京都港区六本木 6-12-2-B3304

株式会社吉香  
〒100-0014 東京都千代田区永田町 2-9-8-201

09

mompekko  
Archive

2013

グローバル



2014

raita



2015

takijima



2016

cosmo



2017

nagato

2018

motonosumi



2019

tanada



## 10

### Booth Information

#### 株式会社 Archis

モチベッコの販売



歴史的・文化的価値のある古民家の再生をはじめ、6次産業商品「モチベッコ」の開発や「田楽米」のブランディングを実施しています。また、岩国市錦町の堀江酒場と長期熟成型の高級ヴィンテージ日本酒「夢雀」を製造、ドバイや香港を中心に販路を拡大しています。今日は、モチベッコをはいて植えたお米を使ったモチモチさくさくの新食感スイーツ「モチベッコ」を限定販売いたします。

TEL : 0839-76-4725 (代表 松浦 奈津子)

#### 玖珂縮の会

ネクタイ、ストール、Tシャツ、ベスト、小物（ポーチ、名刺入れ、カード入れ、コースターなど）の販売



玖珂縮は木綿の糸を加工して縮にします。衣・住生活を豊かにするテキスタイルとして発信・提案しています。毎週火曜日、逸品館（岩国市玖珂町）で活動中。

TEL : 090-6839-6191 (代表 豊川 育子)

#### 合資会社 ロオーリング

帽子・マフラー・シャツの販売



『ROoRING®』は、人と人との温もりにあふれた人生を歩む、本当の個性を培ったあなたに、長く使ってほしいという願いを込めています。

TEL : 0942-77-3297 (代表 實藤 俊彦)  
mail : t-sanefuji@kasuri.jp

#### 問い合わせ先

アグリアート・フェスティバル2019実行委員会事務局(山口県立大学国際文化学部事務局 担当:水谷)  
〒753-8502 山口県山口市桜島3-2-1 TEL:083-928-3423 mail:kikakudesign2019@gmail.com

#### 台湾の藍染 三角湧文化協進会 Sanjiaoyong Cultural Association

台湾藍染作品の展示販売



三つの川に挟まれていたことから「三角湧」と呼ばれていました。後の日本統治時代に改名され現在は「三峽」と呼ばれています。山口県と同じような自然資源が豊かな上に、藍染産地として有名です。「三角湧」の藍染は日本の植民地時代に、表彰のされました。両国文化交流として展示作品を持って来ました。明治時代表彰された伝統閩南服の展示と「三角湧」の藍染販売をいたします。

mail : scy.collage@msa.hinet.net

#### つむぎラボ

ほたるかご・ヒンメリの展示と販売



山口市をまわらでつなぐ活動をしています。名田島(なたじま)で採れた小麦のわらで、ほたるかごやヒンメリをつくりました。展示・販売いたします。

コーディネーター: 粉川 妙

TEL : 080-3055-0527 (担当 杉本 由子)

#### 山口ファッション&テキスタイル 研究所 Y-FATI

パネル展示と帽子の販売



山口県立大学大学院国際文化学研究所企画デザイン研究室でファッションを学んだ修了生が所属。山口の地域資源を活かした創作活動やファッション関連のイベント運営などを行なっています。

TEL : 080-3872-7148 (所長 武永 佳奈)

#### 有限会社 ナルナセバ

mompeccoの販売



山口県立大学企画デザイン研究室で開発したモチベッコ、サロベッコ、そしてツナギッコなどをアグリアート・フェスティバル限定価格で販売します。

TEL : 083-934-5566 (代表取締役 下川 まつゑ)  
mail : narunaxeve@gmail.com

